

# 星城大学 研究シーズ集

- リハビリテーション学部
- 経営学部

2020年9月

星城大学 地域センター

## ごあいさつ

### 地域センターの理念

「地域にとけこみ、地域に貢献し、地域とともに発展する。」

地域センターは、星城大学の地域貢献活動を推進するため、2011年に設立されました。「地域にとけこみ、地域に貢献し、地域とともに発展する」という理念を掲げ、以下の行動指針に従って活動しています。

1. 星城大学を、地域とふれあい、地域にとけこむ、地域の構成員「大学市民」にします。
2. 星城大学を、地域貢献を通し、地域や人々、学生、教職員から喜ばれる大学にします。
3. 星城大学を、人々が立ち寄り、利用し、集う大学にします。
4. 地域と人々と大学とをつなぎ、協働を生み出します。
5. 新しい地域貢献のアイデアを生み出し実現します。
6. 星城大学を、愛知県でもっとも有名な地域貢献大学にします。

活動にあたって、一人でも多くの学生や教職員が地域との関わりを持てるように、星城大学の中に地域貢献しやすい環境を構築することを目指しています。センター設立以来、地域の方々とのつながりがいくつも芽生え、具体的な協働活動に繋がる機会が増えています。

さて、2009年度に初めて発刊された本学の研究シーズ集も本年度で改訂第15版となりました。

本年度も既に、いくつかの協働プロジェクトが始動しております。どうかこの冊子をご覧いただき、ご関心をお持ちになりましたら、ぜひ、お気軽にお問い合わせください。

私たちは、地域の皆様とのご縁を大切に、地域の皆様と一緒に活動できることを願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

2020年9月吉日

星城大学 地域センター  
センター長 林 久恵

### 連絡先

星城大学 地域センター

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台2-172

Tel : 052-601-6000 (代表)

e-mail : koryu@seijoh-u.ac.jp

# 目 次

## ■リハビリテーション学部

安倍基幸 教授	: リハビリテーション医学全般	2
岸貴介 教授	: 哲学、倫理学、宗教学	3
山田和政 教授	: 理学療法学、健康支援学	4
古川公宣 教授	: 運動学、電気生理学、心身健康科学	5
太田進 教授	: 理学療法学	6
坂井一也 教授	: 精神障害者地域生活支援、精神科作業療法、障害者スポーツ、就労支援	7
竹田徳則 教授	: 高齢者健康支援学、認知症予防、介護予防、社会疫学	8
藤田高史 教授	: 日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学	9
長谷川義美 准教授	: 解剖学教育	10
中谷直史 准教授	: 生理学	11
林久恵 准教授	: 理学療法学	12
越智亮 准教授	: 理学療法学、健康支援学	13
大野善隆 准教授	: 筋肉生理学	14
林浩之 准教授	: 作業療法学、脳卒中リハビリテーション、上肢運動	15
林尊弘 講師	: 理学療法学、介護予防、運動疫学	16
富山直輝 講師	: 運動老年学、健康支援、介護予防、作業療法学	17
林原千夏 講師	: 発達障害作業療法、特別支援教育、乗馬療法、医療者のコミュニケーション	18
牧野多恵子 講師	: 臨床心理学、神経心理学、老年心理学	19
大古拓史 助教	: 理学療法学、健康支援学	20
藤田玲美 助教	: 理学療法学	21
窪優太 助教	: 作業療法学	22
竹内佳子 助教	: 手の外科分野におけるリハビリテーション、作業療法学	23

## ■経営学部

赤岡美津子 教授	：教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア教育論、女性史・ジェンダー論	25
秋山健太郎 教授	：経営学、エネルギー・産業政策、経営戦略論	26
天野圭二 教授	：国際関係学、文化経済論、コンテンツ産業論	27
石田隆城 教授	：流体力学、計算理工学、空気調和工学	28
小川純子 教授	：教職論、教育原理、教育方法論、生徒指導、特別支援教育	29
加藤省三 教授	：情報工学、経営工学	30
加藤知子 教授	：言語、英語、宗教、教養教育、経営と女性	31
北野達也 教授	：地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医学教育、社会保障、健康教育、地域防災など	32
小島伸之 教授	：生徒指導、教育制度論、教職論、教育課程論 英語科教育法	33
小島廣光 教授	：NPO論	34
神野真寿美 教授	：英語教育	35
鈴木愛一郎 教授	：コーポレートファイナンス、M&A、会社法	36
Martin Snyder 教授	：英語、ビジネス英語、異文化理解	37
高須博 教授	：保健体育科教育法、道徳教育研究、教職論、教育課程論	38
田中信幸 教授	：教育制度論、教育経営論、教育課程論、特別活動論	39
崔俊 教授	：戦略経営、危機管理、技術経営、人的資源管理	40
野村淳一 教授	：経営情報学、経営工学、社会システム工学、教育工学	41
松原隆治 教授	：考古学、博物館学、遺跡・史跡の保存と活用	42
横井康博 教授	：スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス	43
盧聰明 教授	：経営学、組織論、企業文化論	44
伊藤春子 准教授	：日本語教育学	45
岡室美恵子 准教授	：マクロ経済学	46
杉浦優子 准教授	：経営組織論、経営管理論、人的資源管理論	47
高濱優子 准教授	：人的資源管理、組織行動、キャリア開発	48
谷口庄一 准教授	：観光学、まちづくり論、都市・地域計画	49
松原茂仁 准教授	：経営学、経営戦略、経営管理、マーケティング	50
北田友治 講師	：運動生理学、トレーニング科学、健康科学	51
日下部直美 講師	：現代中国語文法、中国語教育、言語学	52
高崎義幸 講師	：地域社会学、観光まちづくり	53
長澤省吾 講師	：運動生理学、水泳	54
松本美紀 講師	：日本語教育学	55

注1) 教員の配列は職ごとの50音順

注2) 教員からの任意の提出による(全教員の研究シーズを掲載したものではありません)

# リハビリテーション 学部

## I 専門分野

リハビリテーション医学全般

## II キーワード

障害者、血流、超音波

## III 研究テーマ

1. 脳卒中・脊髄損傷者等の障害者における血流動態（下肢、心、頸部）の研究
2. 脊髄損傷患者の合併症（自律神経過反射、起立性低血圧、筋損傷などに関する）の臨床的研究
3. 血管拡張反応（Flow Mediated Dilatation : FMD 法）による健常者・障害者の動脈硬化の研究

## IV 研究紹介

1. 脳卒中、脊髄損傷患者はの血流動態で下肢深部静脈血栓症の機械的予防ははまだ明確ではない。予防法は何が合理的に良いか、全く新しい視点より運動を中心に静脈還流が増加する方法をみいだしており、研究を進めているところである。また起立時の脳の血流動態も別な視点より研究を行っている。
2. 脊髄損傷者の合併症は多い。特に自律神経過反射に注目して従来の原因以外にも起こりうる。合併症を中心に臨床研究を進めている。
3. 早期の動脈硬化を測る指標として血管内皮機能検査がある。血流依存性血管拡張反応と呼ばれ血管エコーにて上腕動脈にて評価するものである。この評価は各種介入で変動することが特徴である。既に若年者から高齢者までの健常者の多数例のデータ蓄積はおこなっている。現在脳卒中片麻痺患者を対象として介入による血管内皮機能の研究を行っている。

## 【参考】

■プロフィール：宮城県生まれ、産業医科大学卒業、2008年より星城大学教授

■担当科目：リハビリテーション概論、リハビリテーション医学、内科学Ⅰ、内科学Ⅱ、一般臨床医学、画像診断学、大学院：病態運動学リハビリテーション学特論Ⅰ、運動器障害系リハビリテーション学特論Ⅱ、健康支援学研究法

■社会的活動：厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員、日本リハビリテーション医学会中部東海地方会幹事など

### ■主な著書・論文など

著書（過去2年）

- ・「NEW エッセンシャル整形外科学」2012年 医歯薬出版 p515-516

論文（過去2年間）

- ・脊髄損傷対麻痺者に対する深呼吸、他動運動が大腿静脈血流に与える影響  
日本脊髄障害医学会誌 27巻(1) p20-24,2014
- ・脊髄障害患者の深部静脈血栓症 当院での最近の頻度  
日本脊髄障害医学会誌 27巻(1) p148-149,2014
- ・二分脊椎に脳出血を合併した成人例. 日本脊髄障害医学会誌 26巻(1), p156-157, 2013
- ・脊髄損傷患者の筋損傷に対するエコー診断の有用性.日本脊髄障害医学会誌 25巻(1), p51-52, 2012
- ・Development of hand-assist robot with multi-degree-of-freedom for rehabilitation therapy.  
Mechatronics vol17(1),p136-146, 2012

## I 専門分野

哲学・倫理学・宗教学

## II キーワード

よく生きる、幸福、苦

## III 研究テーマ

1. よく生きることについて
2. 世界や人生を肯定することについて

## IV 研究紹介

1. 「最も大切なのは、生きることではなく、よく生きることだ」というのは、プラトンの作品におけるソクラテスの言葉である。では、「よく生きる」とはどう生きることか。この問いは、我々人間の生き方に関わるという意味で、倫理学の問いである。そして、倫理学が、我々人間の生き方について深く掘り下げて考えるものである限り、この問いは哲学の問いである。このような意味で、我々人間の生き方について哲学することを試みている。(例えば、普通我々は「幸福な人生」を求める。そしてその際、我々は、そうとは知らず、「幸福な人生」を「よく生きること」と解しがちである。だが、「幸福な人生」は本当に「よく生きること」なのだろうか?…例えばこのような仕方でも問いを深める作業を試みている。)
2. 我々人間は、通常、自分が満足できる人生や世界を求めている。しかしながら、自分の思い通りにならないのが世の常であり、その意味で、何らかの意味での苦が我々には付きものである。だからこそ、我々は通常、自分の思い通りにはならない人生に、何らかの仕方でも折り合いをつけながら生きている。では、すると、どのような折り合いのつけ方が、より望ましいのだろうか。言い換えれば、生きることに伴う大小様々な苦にいかなる仕方でも対処するのが(あるいは場合によってはむしろ対処しないのが)望ましいのか。このような問いは仏教をはじめとする宗教の問いであるとも言える。故に、その点も考慮に入れた上で、苦への哲学的な対処法の探求を試みている。

## 【参考】

■プロフィール：鳥取県鳥取市生まれ、東京大学文学部卒業、2020年より星城大学教授

■担当科目：哲学、倫理学、他

■社会的活動：東海市行政不服審査会委員、四日市看護医療大学研究倫理委員会外部委員、他

### ■主な著書・論文など

- ・『通訳ガイド 地理・歴史・一般常識 完全対策 改訂第7版』2019年、法学書院、編著
- ・『通訳ガイド用語事典～日本の地理・歴史を理解するために～』2018年、法学書院、編著
- ・『フィヒテ全集 第10巻 哲学評論・哲学的書簡』2015年、哲書房、共訳
- ・「英雄と運命—あるいは、ニーチェの「英雄的性質」について—」2019年、『研究紀要』第19号、単著
- ・「ハラスメントの概念を問い直す—嫌がらせと人権侵害という観点から— (上)」、2017年、『研究紀要』第17号、単著
- ・「ハラスメントの概念を問い直す—嫌がらせと人権侵害という観点から— (下)」、2017年、『研究紀要』第17号、単著
- ・「肯定についての試論」2015年、『研究紀要』第15号、単著
- ・「よく生きるとはどう生きることか—幸福についての試論—」2014年、『國學院大學紀要』第52号、単著

## I 専門分野

理学療法学・健康支援学

## II キーワード

日常生活行動・健康支援・高齢者・転倒予防

## III 研究テーマ

- ①日常生活行動と健康支援
- ②高齢者の転倒予防

## IV 研究紹介

- ①「日常生活行動と健康支援」をテーマに研究活動を行っています。現在、病院・施設に入院・入所または外来受診されている要支援・要介護高齢者の方を対象に、日々の生活行動を身体活動量の観点から分析し、健康の維持・増進を図るための方策について検討しています。
- ②「高齢者の転倒予防」をテーマに研究活動を行っています。昨今、実際の動作に近い感覚でスポーツを体験できるゲームが脚光を浴びています。そこで、ゲームによる運動効果を検証し、高齢者の転倒予防を目的としたトレーニングメニューについて取り組んでいます。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県生まれ、理学療法士、博士（医学）
- 担当科目：日常生活活動学・地域理学療法学セミナー など
- 社会的活動：日本理学療法士協会、愛知県理学療法士会、理学療法科学学会、専門リハビリテーション研究会、健康レクリエーション研究会などの会員
- 主な著書・論文など
  - ・『福祉用具ハンドブック』大井企画 2013. 共著
  - ・『転倒予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル』南江堂 2013. 共著
  - ・『二重課題歩行時の注意分散が予期機構（視覚情報）に与える影響』健康レクリエーション研究 2016. 共著
  - ・『日常生活活動の安全面からみた Timed up and Go テストの有用性』理学療法科学 2015. 共著
  - ・『在宅脳血管障害患者の気温変化による日常生活への影響』理学療法科学 2015. 共著
  - ・『高齢者における歩行援助ツールとしての歩行支援機 ACSIVE の有用性』健康レクリエーション研究会雑誌 2015. 共著
  - ・『ゲーム機器が高齢者のバランス機能に与える影響』岐阜県理学療法士会学術誌 2013. 共著
  - ・『立ち上がり動作直後の重心動揺の違いから見た転倒リスクについてー若年者と高齢者の比較からー』岐阜県理学療法士会学術誌 2013. 共著



## I 専門分野

運動学、電気生理学、心身健康科学

## II 研究テーマ

1. 表面筋電図による運動解析
2. 表面筋電図波形分析方法の検討

## III 研究紹介

1. 表面筋電図は、皮膚表面に貼付した電極から、筋肉が働いたときに発生する「活動電位」を検出し、運動中の筋機能を分析する機器です。この機器を用いて、腰部、膝関節、肩関節の運動メカニズムを解析し、様々な筋電図学的評価指標を提案してきました。
2. 表面筋電図測定で得られた波形を従来の方法で分析した場合に検出し得なかった状況を新しい分析指標を用いることで可能にする試みを行っています。これまでに、加齢による骨格筋の変化、筋疲労の検出に成果をあげています。
3. ミラーボックスは 1996 年に、インドの学者によって報告された鏡を用いた身体機能回復の治療法です。麻痺や痛みの改善に効果があるとされていますが、どのようなメカニズムによってその改善が起こるかは明らかにされていません。私はこれまでに、ミラーボックスを用いて図形描画を行った際に、被治療側に起こる筋機能の変化を測定し報告しています。

## 【参考】

- プロフィール：岐阜県海津市生まれ、国立療養所箱根病院附属リハビリテーション学院 理学療法学科卒業、人間総合科学大学大学院 心身健康科学研究科博士後期課程修了（心身健康科学博士）、2007年から星城大学勤務
- 担当科目：運動学、運動学実習、臨床運動学、情報処理演習など
- 社会的活動：日本理学療法協会、日本理学療法連盟、愛知県理学療法協会、日本臨床神経生理学会、日本心身健康科学学会、シニアフィットネス研究会などの会員
- 主な著書・論文など
  - ・「学生のための物理療法学」 2004年、大学教育出版 共著
  - ・「転倒予防・介護予防のための運動器機能向上トレーニングマニュアル」2008年、大伸社 共著
  - ・「理学療法ゴールドマスターテキスト第2巻 運動療法学」2010年、メジカルビュー 共著
  - ・肩関節内転運動時の三角筋筋活動の表面筋電図学的分析—三角筋前部線維の活動に着目して— 2007年 心身健康科学 単著
  - ・Motion of drawing hand induces a progressive increase in muscle activity of the non-dominant hand in Ramachandran's Mirror-Box. *Journal of Rehabilitation Medicine* 44(11), pp939-943, 2012, 共著
  - ・「こころ」が運動に与える影響を科学する How does human mind influence motor function? -The introduction of indices that may reveal it-、心身健康科学、第8巻2号、pp20-26、2012、単著

## I 専門分野

理学療法学

## II キーワード

バイオメカニクス (骨関節)、変形性膝関節症、スポーツ傷害、高齢者の運動機能向上、  
デイサービス、ものづくり

## III 研究テーマ

1. バイオメカニクスの視点に基づいた運動器疾患の病態解析と高齢者の運動機能向上
2. 臨床現場からのものづくり –今、患者さんを良くしたい–

## IV 研究紹介

1. 50歳以上の女性の3人に2人、男性の2人に1人は、変形性膝関節症とされています。この膝の障害がいずれ転倒・骨折・要介護と深く関連してきます。そのため、中年期や前期高齢者においてその予防がとても重要です。私の研究室では、現在特に発症前の40歳代に注目してMRI計測による膝の軟骨評価と歩行時の膝にかかる力を比較して、その予防法を検討しています。またより早期に症状を予測することを目標に関節を動かした時の振動(関節の摩擦)を計測する方法を検討しています。また、高齢者を対象として、ポールウォーキングという両方にポールをもった歩行の解析から臨床応用・地域での実践を行ってきました。
2. 日々の目の前の患者さんを「今」良くすることを、目標にものづくりを続けてきました。今よくするためには、ハイテクではなくローテクしかありません。ローテクを組み合わせていろいろな工夫ができます。今までに肩関節の夜間痛軽減サポータを開発し効果を検証しました。現在、特に力を入れているのは、膝関節サポータにゴムチューブを装着して、その場で患者さんの歩行を観察しながらテーラーメイドでアシストの強さを修正することを可能にした装具です。これは、脳卒中片麻痺患者さん、変形性膝関節症患者さんに効果があると考え現在その検証を進めています。また更にこれを応用し転倒予防の膝アシストサポータも開発しました。こちらも検証を進めていきます。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県安城市生まれ、名古屋大学大学院医学系研究科博士後期課程 2008 年修了、2013 年より星城大学准教授
- 担当科目：運動器障害理学療法学実習、理学療法評価診断学 I、運動障害理学療法学、理学療法技術演習 I、理学療法評価診断学実習
- 社会的活動：NPO 法人愛知県理学療法学会学術誌部長、スポーツ傷害予防研究会代表世話人
- 主な著書・論文など
  - ・ Ota S, Goto H, Noda Y, Fujita R, Matsui Y. Relationship between standing postural alignments and physical function among elderly women using day service centers in Japan. J Back Musculoskelet Rehabil. 2014. (in press)
  - ・ Ota S, Ueda M, Aimoto K, Suzuki Y, Sigward SM. Acute influence of restricted ankle dorsiflexion angle on knee joint mechanics during gait. Knee. 2014;21:669-675. doi: 10.1016/j.knee.2014.01.006.
  - ・ Ota S, Nakanishi A, Sato H, Akita S, Hase K, Suzuki Y. Differences in knee joint kinematics and kinetics during level walking and walking with two types of poles - focus on knee varus moment -. J Musculoskelet Res. 2013;16(4)1350018 (9pages). DOI: 10.1142/S0218957713500188
  - ・ Ota S, Goto H, Fujita R, Haruta M, Noda Y, Tamakoshi K. Application of pole walking to day service centers for use by community-dwelling frail elderly people. Int J Gerontol. 2014;8:6-11. DOI: 10.1016/j.ijge.2013.03.010

## I 専門分野

精神障害者地域生活支援、精神科作業療法、障害者スポーツ、就労支援

## II キーワード

精神障害、作業療法、障害者スポーツ、就労支援

## III 研究テーマ

1. 精神障害者の地域生活に関する研究
2. 精神障害者スポーツに関する研究

## IV 研究紹介

1. ここ数年、精神障害者は毎年約 10 万人ずつ増えて 300 万人を超えています。また、平成 22 年に行われた「こころの健康政策構想会議」では健康・生活被害指標（障害調整生命年 DALY）を用い、精神疾患を 3 大疾患の 1 つとしました。精神障害者の地域生活支援は、重要な課題であり、就労・家族支援を含めた地域での生活支援に取り組んでいます。
2. スポーツと健康は、密接な関係があります。精神障害者スポーツの中心が、入院患者から地域生活者になり変わり、バレーボール、フットサルが地域で行われるようになりました。今後、さらに地域で生き生きと精神に障害がある方と一緒にスポーツを行い、普及、啓発、研究にも取り組んでいきたいと考えています。

## 【参考】

■プロフィール：佐賀県鳥栖市出身、神戸大学医療技術短期大学部卒業、神戸大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、大村病院、いぬお病院、第一医療リハビリテーション専門学校、健康科学大学、2011 年より星城大学リハビリテーション学部教授、作業療法士・精神保健福祉士教育・研究と共に、臨床・地域で精神に障害がある方と関わり、お互いに成長していきたいと模索している。

■担当科目：精神障害作業療法学Ⅰ・Ⅱ、精神障害作業療法学実習など

■所属学会：日本作業療法士協会、日本精神保健福祉士協会、日本デイケア学会、日本職業リハビリテーション学会、日本精神障害リハビリテーション学会、日本スポーツ精神医学会など

■社会的活動：日本作業療法士協会評議員、日本デイケア学会理事、日本ソーシャルフットボール協会理事、日本陶芸療法協会理事、九州地区精神障害スポーツ推進連絡協議会会長、第 5,6,7,8,9,11,12 回全国障害者スポーツ大会九州・沖縄ブロック代表監督(精神障害)など

### ■主な著書・論文など

- ・臨床精神科作業療法入門（文光堂）共著
- ・図解作業療法技術ガイド（文光堂）共著
- ・作業療法のとらえかた（文光堂）共著
- ・Kazuya Sakai, Takeshi Hashimoto, Sadafumi Inuo :,Factors Associated with Work Outcome among Individuals with Schizophrenia :Investigating Work Support in Japan . WORK32(2). 2009
- ・坂井一也,杉村直哉：精神科早期退院促進プログラムの開発と作業療法の実践 初回入院・早期退院事例.作業療法 27(5).2008
- ・坂井一也,春山佳代,山下佐織,杉村直哉：統合失調症に対するデイケアにおける就労支援プログラム－5 年間の追跡調査－.健康科学大学紀要 7.2011
- ・坂井一也：スポーツを通してのノーマライゼーション～精神障害者からアスリートへ～.戸山サンライズ.2009

**I 専門分野**

高齢者健康支援学、認知症予防、介護予防、社会疫学

**II キーワード**

認知症予防、介護予防、高齢者健康支援、憩いのサロン事業

**III 研究テーマ**

1. 心理社会面に着目した高齢者のための包括的支援に関する研究
2. 憩いのサロン事業を活用した介護予防・認知症予防に向けた介入研究
3. 心理社会面に着目した認知症予防に関する研究

**IV 研究紹介**

1. 愛知県武豊町で自治体と地域住民との共同研究として、心理社会面に着目した介護予防・認知症予防のための「憩いのサロン」事業を活用した介入研究と効果の検証に取り組んでいる。
2. 認知症予防に向けた「認知症リスクチェックリスト」を作成し普及に努めている。
3. 全国 40 自治体 20 万人の高齢者調査とその後の追跡から要介護認定の心理社会的危険因子の解明と介入策の提言に取り組んでいる。

**【参考】**

■プロフィール：広島県出身、1978 年日本福祉大学社会福祉学部卒業、1982 年国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院卒業、1982 年から名古屋市厚生院、有馬温泉病院などで勤務、その後 2003 年茨城県立医療大学保健医療学部助教授、2005 年星城大学リハビリテーション学部教授、博士（社会福祉学）

■担当科目：医療学入門、作業療法学特論Ⅱ（認知症）、作業療法学研究法、作業療法学研究法特論など

■所属学会：日本公衆衛生学会、日本老年精神医学会、日本認知症ケア学会、日本認知症予防学会など

■社会的活動：日本認知症予防学会評議員、東海市まちづくりアドバイザーなど

■主な著書・論文など

- 1) 「認知症介護実践者研修標準テキスト」、ワールドプランニング、分担執筆、2016.
- 2) 「認知症の作業療法」第 2 版、医歯薬出版、編著、2016.
- 3) Health Inequalities in Japan: An Empirical Study of the Older People. Trans Pacific Press, Melbourne. 分担執筆、2010.
- 4) Social interaction and cognitive decline: Results of 7-years community intervention. Alzheimer's & Dementia: Translational Research & Clinical Interventions 3 (1):23-32, 2017. (共著)
- 5) Positive affect and incident dementia among the old. Journal of Epidemiological Research 2: 118-124, 2016. (共著)
- 6) 認知症を伴う要介護認定発生のリスクスコアの開発：5 年間の AGES コホート研究. 日本認知症予防学会誌 4: 25-35, 2016.
- 7) Effect of community intervention program promoting social interactions on functional disability prevention for older adults: propensity score matching and instrumental variable analyses, JAGES Taketoyo study. Journal of Epidemiology & Community Health. doi: 10.1136/jech-2014-205345. (共著)
- 8) 地域介入研究による介護予防効果検証：武豊プロジェクト. 総合リハビリテーション 42: 623-629, 2014.

## I 専門分野

日常生活活動学、健康支援学、高次脳機能障害治療学

## II キーワード

認知症予防、手段的日常生活活動、生活支援、評価

## III 研究テーマ

- (ア) IoT を用いた遠隔からの日常生活支援 ～高齢者および認知症者を対象に～
- (イ) アルツハイマー型認知症者の日常生活活動評価と生活支援

## IV 研究紹介

1. アルツハイマー病患者とその前駆段階である軽度認知症障害 (MCI) 者は主に記憶力が低下します。そのため家庭での生活においては、服薬管理や火の始末などの日常生活活動が特に上手く実行できなくなります。そこで、これらの日常生活活動の支援のために IoT を用いた生活支援機器の開発を行っています。
2. アルツハイマー病 (AD) 者に対する生活活動が、症状進行とともにどのように変化するのかについては、未だ検討が不十分です。現在、私は、AD 者の日常生活活動が、重症度によってどのように異なるのか調べています。このことを明らかにすることによって、AD 者の生活援助に寄与するものと考えています。

## 【参考】

- プロフィール：三重県いなべ市生まれ、国立療養所東名古屋病院附属リハビリテーション学院作業療法学科卒業、金沢大学大学院医学系研究科博士課程修了（保健学博士）、2006年から星城大学リハビリテーション学部講師、2010年より准教授
- 担当科目：高次脳機能作業療法学、高次脳機能作業療法学演習、日常生活活動学、日常生活環境学
- 社会的活動：東海市介護予防教室講師、日本作業療法協会事例検討委員
- 主要著書・論文など
  - ・Takashi Fujita, Kiyohito Kato, Masako Notoya : The effectiveness of diverse technology-based instructions in assisting people with Alzheimer's disease with medication management, *Disability and Rehabilitation: Assistive Technology* Apr 23:1-9.
  - ・藤田高史、和田しず香、渡邊和子：養護老人ホーム入所高齢者に対する歌唱とパーキンソンダンス効果の検討 - バランス能力、精神機能、認知機能、前頭葉機能に着目して -、*日本健康レクリエーション研究* 15 : 27-37.
  - ・砂原伸行、中谷謙、藤田高史、酒野直樹、井上克己：健常人における音の左右方向判断能力、*つるま保健学会誌* 36(1)、21 - 26、2012
  - ・Takashi Fujita, Masako Notoya, Nobuyuki Sunahara, et. al : Development and review of the validity of an "instrumental activities of daily living test" (IADL test) performed as a desk evaluation of patients with Alzheimer's type of dementia, *Journal of the Tsuruma Health Science Society* : 1-13, 2010
  - ・藤田高史、二木淑子、高橋美幸、杉本まみ、能登谷晶子：軽度アルツハイマー病患者に対する遂行機能評価としての片づけ検査の妥当性、*作業療法* 28 : 396-409、2009

## I 専門分野

解剖学教育

## II キーワード

解剖学、e-ラーニング、筋音図

## III 研究テーマ

1. 解剖学における教育方法
2. 筋音図による嚥下機能評価

## IV 研究紹介

### 1. 解剖学における教育方法

医療従事者を志す学生には解剖学は避けて通れません。解剖学の修得には膨大な量の記憶は欠かせませんが、理解無しの記憶は徒に初学者を惑わせるのみです。講義や実習で適切な図譜を用いたタブレットの導入や3Dカメラで撮影した剖出部の提示等を通して学生のインプット方法を考案し、e-ラーニング等を活用したアウトプットによる知識の定着を試みています。

### 2. 筋音図による嚥下機能評価

ものを飲み込む(嚥下)機能が低下した高齢者が増え、誤嚥性肺炎が臨床や介護の場で大きな問題になっています。嚥下機能の評価が簡単に行えるように、筋音図による嚥下機能の評価方法を開発しています。

## 【参考】

■プロフィール：岐阜県多治見市生まれ、静岡大学教育学部卒業、博士(医学)、藤田保健衛生大学医学部を経て2017年より星城大学准教授

■担当科目：解剖学、解剖学実習

■社会的活動：日本解剖学会、コ・メディカル形態機能学会の会員

### ■主な著書・論文など

- ・ “Phenotypic changes of AADC-only-immunoreactive cells in the alimentary canal of the laboratory shrew, *Suncus murinus*, induced by systemic administration.” *Okajimas Folia Anatomica Japonica* 92(2), 2015, 共著
- ・ “Requirement of DLG1 for Cardiovascular Development and Tissue Elongation during Cochlear, Enteric, and Skeletal Development: Possible Role in Convergent Extension.” *PLOS ONE*, 2015, 共著
- ・ “High expression of Pitx-2 in the ICAT-deficient metanephros leads to developmental arrest.” *Acta Histochem Cytochem* 43, 2010, 共著
- ・ “Loss of ICAT gene function leads to arrest of ureteric bud branching and renal agenesis.” *Biochem Biophys Res Commun* 362, 2007, 共著

## I 専門分野

生理学

## II キーワード

生理学、骨格筋生理学、筋肥大、筋萎縮、メタボリックシンドローム、サルコペニア

## III 研究テーマ

1. 骨格筋由来細胞を用いた筋萎縮抑制因子の探索
2. 骨格筋の恒常性の破綻による異所性脂肪化、異所性骨化の抑制薬の探索

## IV 研究紹介

1. 骨格筋は成人において身体の約40%をしめる組織で、運動機能の他に、全身の代謝調節、臓器の物理的保護を行うなど、非常に重要な働きを行っています。骨格筋量の減少は、私たちの生活のQOLを著しく低下させるだけでなく、免疫力の低下、基礎代謝の低下によるメタボリックシンドロームの促進など多くの病態に関わっています。骨格筋量を維持することは私達が健康な生活を維持する上で非常に重要です。骨格筋の量を調節する機構は様々ありますが、私は分泌因子に注目し研究しております。血清中の因子で筋肥大を誘導するような因子、また逆に筋萎縮を誘導するような分子を骨格筋由来細胞を用いて探索しています。さらに、筋肥大を誘導する分子、薬剤の探索を行うことで筋萎縮の予防を目的に研究を行っています。
2. 私達の筋肉(骨格筋)は非常に優れた再生能力を持ち、通常は健康な状態で保たれています。しかし、筋線維(筋細胞)の崩壊、筋再生を繰り返すうちに、骨格筋内に脂肪組織が出来てしまったり(筋肉内異所性脂肪)、骨格筋内に骨ができてしまったりすることがあります(筋肉内異所性骨化)。こういった病態は患者に大きなストレスと運動機能の制限を生じてしまいます。私はこういった現象の原因となる細胞(間葉系前駆細胞)の研究を行っており、骨格筋由来の間葉系前駆細胞を用いて脂肪化、骨化のメカニズムを解明し、骨格筋を健康な状態で保つための薬剤、化合物の探索を行っています。

## 【参考】

- プロフィール: 兵庫県宍粟市生まれ。徳島大学工学部生物工学科卒業、徳島大学大学院栄養学科(修士)、徳島大学大学院医学部(博士)を修了。医学博士。藤田医科大学総合医科学研究所に勤務後、2020年より星城大学准教授
- 担当科目: 生理学 I、生理学 II、生理学実習、生活と科学、生命と科学、認知機能障害学特論、リハビリテーション健康支援学演習 II
- 社会的活動: 日本肥満学会会員
- 主な著書・論文など
  - ・ Kusano T, Nakatani M, Ishiguro N, Ohno K, Yamamoto N, Morita M, Yamada H, Uezumi A, Tsuchida K. Desloratadine inhibits heterotopic ossification by suppression of BMP2-Smad1/5/8 signaling. The Journal of Orthopaedic Research. In Press 2020年2月
  - ・ Hitachi K, Nakatani M, Tsuchida K. Long Non-Coding RNA Myoparr Regulates GDF5 Expression in Denervated Mouse Skeletal Muscle. Non-coding RNA 5(2) 2019年4月
  - ・ Hitachi K, Nakatani M, Takasaki A, Ouchi Y, Uezumi A, Ageta H, Inagaki H, Kurahashi H, Tsuchida K. Myogenin promoter-associated lncRNA Myoparr is essential for myogenic differentiation. EMBO reports 20(3) 2019年3月
  - ・ Kasai T, Nakatani M, Ishiguro N, Ohno K, Yamamoto N, Morita M, Yamada H, Tsuchida K, Uezumi A. Promethazine Hydrochloride Inhibits Ectopic Fat Cell Formation in Skeletal Muscle. The American journal of pathology 187(12) 2627-2634 2017年12月

## I 専門分野

理学療法学

## II キーワード

末梢循環障害、糖尿病足病変、足病変予防、人工炭酸泉

## III 研究テーマ

1. 個人研究 足病変を有する症例の足底にかかる負荷量の測定方法に関する検討
2. 共同研究 足病変形成予防にむけた力学的負荷量軽減方策に関する検討  
人工炭酸泉による部分浴・全身浴に伴う生体反応に関する検討

## IV 研究紹介

1. 足病変を有する症例の足底にかかる負荷量の測定方法に関する検討  
足部の潰瘍再発は、下肢切断リスクを高め、要介護状態に陥る原因となる。潰瘍の再発は足部の力学的負荷量の増加が原因となることが指摘されているが、これまで再発予防に向けた具体的な数値目標は提示されていなかった。  
そこで研究テーマとして足底にかかる力学的負荷量測定器の開発を行い、力学的負荷軽減方策について研究を進めている
2. 人工炭酸泉による部分浴・全身浴に伴う生体反応に関する検討を行っている。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ。最終学歴 名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。  
名古屋大学医療技術短期大学部 卒業後、名古屋共立病院、名古屋大学医学部保健学科（理学療法学専攻 助教）を経て 2012 年 4 月より現職。

### ■担当科目：

#### 【前期】

内部障害理学療法学 (3 年生)  
評価診断学演習 (3 年生)  
運動療法学 (2 年生)

#### 【後期】

内部障害理学療法学実習 (3 年生)  
理学療法技術特論Ⅱ (3 年生)  
理学療法評価診断学Ⅱ (2 年生)  
運動療法学実習 (2 年生)

#### 【通年・集中】

臨床実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ, 理学療法学セミナー, 理学療法学研究法特論

### ■社会的活動：下肢救済足病学会 【編集委員・評議員】

日本血管外科学会 【チーム医療推進委員】

日本理学療法士学会 【学術大会準備委員】 日本糖尿病理学療法学会 【運営幹事】

The Association for the Advancement of Wound Care's (AAWC) 【Research committee】

愛知県理学療法士会 【白書委員会循環器班 代表】

所属学会： 日本脈管学会、日本看護医療学会、心臓リハビリテーション学会

### ■主な著書

- ・林 久恵 (野村卓生・河辺信秀 編), 身体機能・歩行動作からみたフットケア, 文光堂, pp78-92, 2016
- ・林 久恵 (内山 靖 編), 理学療法診療指針. 医学書院, pp428-431, 2015
- ・林 久恵 (大平雅美 他 編), 糖尿病理学療法. 株式会社メジカルビュー社, pp280-286, 2015,
- ・近藤恵理子・林 久恵 (内山 靖 編), エビデンスに基づく理学療法 改訂第 2 版. 医歯薬出版株式会社, pp 254-267, 2015
- ・林 久恵 他 (西田壽代 編), はじめよう! フットケア 第 3 版, 日本看護協会出版, pp220-224, 2013
- ・林 久恵 (山崎裕司 他編), 内部障害理学療法学テキスト. 改訂第 2 版, 南江堂, pp 203-118, 2012
- ・林 久恵(上村哲司 編), 足病変ケアマニュアル. 学研メディカル秀潤社, pp 104-109, 2010



## I 専門分野

理学療法学、健康支援学

## II キーワード

転倒、高齢者、トレーニング、バイオメカニクス

## III 研究テーマ

1. 高齢者の転倒に関するバイオメカニクス研究
2. 筋の機能特性と運動パフォーマンスに関する研究

## IV 研究紹介

1. 歩行中に障害物につまずいたり、床で滑ったりすることがあります。この時、素早く大きく足を踏み出すことができれば転倒を回避することができますが、運動機能が低下するとこの反応がうまくできずに転んでしまうことが多くなります。私は高齢であっても転びにくい元気な方と、転びやすい虚弱な方の運動機能の違いはなにか、また転倒を回避するための足の踏み出し動作の運動機能を改善させるために効果的なトレーニングはないかという点について研究をすすめています。
2. 筋肉は運動するために非常に重要な器官です。運動習慣が無ければ、加齢に伴って筋量や筋力が減少し、運動能力は低下します。また、老化に伴う筋肉の萎縮には特徴があり、素早く大きな力を発揮する筋肉が、小さな力を持続して発揮できる筋肉よりも減少しやすいといわれています。私は、パワー、筋力発揮率、筋電図波形などの指標を用いて、スピードの要素を含む筋の収縮特性と、瞬発力や敏捷性が必要な動作との関連性について研究を行っています。

## 【参考】

- プロフィール：2013年4月より星城大学リハビリテーション学部講師、2020年4月より准教授。最終学歴は京都大学大学院医学研究科博士後期課程。
- 担当科目：老年期障害理学療法学、物理療法学、理学療法学研究法など
- 社会的活動：NPO 法人愛知県理学療法学会学術誌編集部長、公益社団法人愛知県理学療法士会知多ブロック運営委員、愛知県理学療法学会誌査読員、その他、英文ジャーナル査読員
- 主な著書・論文など
  - ・越智亮：高齢者理学療法学，3章 高齢者の評価，『基本動作の評価』。島田裕之・牧迫飛雄馬・山田実（編），医歯薬出版，pp201-209，2017。
  - ・越智亮：シンプル理学療法学シリーズ，高齢者理学療法学テキスト，1. ライフステージと高齢者像，『高齢者の定義と分類，老年期の発達課題と「老い」の受容』。細田多穂（監），山田和政・小松泰喜・木林勉（編），南江堂，pp6-10，2017。
  - ・越智亮：理学療法評価学，9. 日常生活活動（ADL）の評価。市橋則明（編），文光堂，pp44-50，2016。
  - ・Ochi A, Ohko H, et al.: Relationship between balance recovery from a forward fall and lower-limb rate of torque development. J Motor Behav, in press.
  - ・Ochi A, Ohko H, et al.: Custom-made hinged knee braces with extension support can improve dynamic balance. J Exerc Sci Fit 16: 94-98, 2018.
  - ・Ochi A, Abe T, et al.: Effect of balance exercise in combination with whole-body vibration on muscle activity of the stepping limb during a forward fall in older women: A randomized controlled pilot study. Arch Gerontol Geriatr 60: 244-251, 2015.
  - ・Ochi A, Yokoyama S, et al.: Differences in muscle activation patterns during step recovery in elderly women with and without a history of falls. Aging Clin Exp Res 26: 213-220, 2014.

## I 専門分野

筋肉生理学

## II キーワード

骨格筋、筋肥大、筋萎縮

## III 研究テーマ

1. 骨格筋の萎縮・肥大・再生のメカニズムに関する研究
2. 筋萎縮の予防、筋肥大・再生の促進を引き起こす刺激に関する研究

## IV 研究紹介

1. 骨格筋には、外からの刺激によって大きさが変化するという特徴があります。たとえば、運動刺激は骨格筋を大きくするなどの良い効果をもたらすことがわかっています。しかし、骨格筋が変化するメカニズムは、未だ多くの謎に包まれています。そこで、骨格筋のミクロな変化を生理学、生化学の実験手法を用いて調べ、そのメカニズムを検討しています。
2. リハビリテーションや理学療法で活用されている刺激を骨格筋へ与えて、骨格筋に起こるミクロな変化を調べています。これまでに、物理的刺激である温熱刺激や電気刺激によって、骨格筋が大きくなることを確認し、さらに、そのメカニズムを検討しています。また、運動刺激によって骨格筋が大きくなるメカニズムも検討しています。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県生まれ、名古屋大学大学院医学系研究科博士課程後期課程修了、2020年より星城大学准教授
- 担当科目：体表解剖学演習、運動学 I
- 主な著書・論文など
  - ・“Lactate increases myotube diameter via activation of MEK/ERK pathway in C2C12 cells.” *Acta Physiol (Oxf)* 223(2), 2018, 共著
  - ・“Suppression of myostatin stimulates regenerative potential of injured antigravitational soleus muscle in mice under unloading condition.” *Int J Med Sci* 13(9), 2016, 共著
  - ・“Deficiency of heat shock transcription factor 1 suppresses heat stress-associated increase in slow soleus muscle mass of mice.” *Acta Physiol (Oxf)* 215(4), 2015, 共著
  - ・“Loading-associated expression of TRIM72 and caveolin-3 in antigravitational soleus muscle in mice.” *Physiol Rep* 2(12), 2014, 共著

#### I 専門分野

作業療法学, 脳卒中リハビリテーション, 上肢運動

#### II キーワード

作業療法学、脳卒中後の上肢、健康支援

#### III 研究テーマ

1. 脳卒中後麻痺側上肢の二次的合併症
2. 高齢者の上肢機能

#### IV 研究紹介

1. 脳卒中を発症すると腕や手に麻痺を生じることがあります。麻痺した手は運動が困難になるばかりではなく、腫れや痛みを生じることがあります。これらは日常生活の遂行を妨げる要因となります。しかしながら、特に手の腫れの原因はいまだ不明であり、効果的な改善策も存在しません。私は、手の腫れの原因は静脈還流が低下していると考えており、静脈還流と手の腫れとの関係性について研究を進めています。また、関係性だけではなく、実際に静脈還流を促進する新しい方策を考案し、研究に取り組んでいるところです。
2. 高齢になれば、ほとんど誰もが手の器用さが低下します。例えば、以前と比べて包丁が使いづらくなったり、字がうまく書けなくなったり、裁縫が難しくなったりするかと思います。私はこれまで手指の動きについて研究を行い、簡単な運動によって手の動きを再び良くすることができる可能性を発見しました。また、認知機能、特に転倒や生活不便との関連性が強い実行機能を改善する対策として手の運動が良い可能性を研究によって見つけました。現在、実際に手の運動を実施した際に、実行機能が高まるのか研究を進めています。

#### 【参考】

- プロフィール：長崎県生まれ、名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻博士（後期）課程修了、2006年より星城大学助手・助教・講師・准教授
- 担当科目：作業療法評価学、運動学、身体障害作業療法学等
- 社会的活動：学術誌作業療法編集協力者、日本作業療法学会演題査読委員
- 主な著書・論文など
  - ・ Exploring the factor on sensory motor function of upper limb associated with executive function in community-dwelling older adults. Nagoya journal of medical science 78(3), 2016.
  - ・ Factors affecting the discharge destination of hip fracture patients who live alone and have been admitted to an inpatient rehabilitation unit. Journal of physical therapy science 28(4), 2016.
  - ・ Necessary metacarpophalangeal joints range of motion to maintain hand function. Hong Kong Journal of Occupational Therapy 24(2), 2014.
  - ・ 脳血管疾患等の患者が自宅退院するために必要な日常生活活動能力. 作業療法, 32(3), 2013.
  - ・ Essential motion of metacarpophalangeal joints during activities of daily living. Journal of hand therapy 26(1), 2013.
  - ・ What ranges of metacarpophalangeal joint flexion and extension are necessary to perform activities without difficulty?. Hand Therapy 18(4), 2013.

## I 専門分野

理学療法学、介護予防、運動疫学

## II キーワード

転倒予防、介護予防、高齢者、健康支援

## III 研究テーマ

1. 地域在住高齢者を対象とした転倒予防における一次予防戦略の開発について
2. フレイル、サルコペニアに関する研究

## IV 研究紹介

1. 介護予防において、健康リスクがある人を対象に介入する二次予防以外に、健康な人も含めた地域住民全体を対象に介入する一次予防があります。介護予防の中でも転倒予防に着目し、どのような地域資源に対する介入が転倒予防の一次予防戦略として効果的かを、大規模調査データを用いて検討している。
2. フレイル、サルコペニアに関連する心理的要因や社会的要因を検討している。また、どのような運動様式が予防に効果的についての研究も進めている。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、愛知医療学院理学療法学専攻卒業、日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科博士課程修了、社会保険中京病院、名古屋大学医学部附属病院、東海医療科学専門学校、名古屋大学未来社会創造機構で勤務、2017年より星城大学助教、2020年より講師。

■担当科目：神経筋障害理学療法学、神経筋障害理学療法学実習、義肢装具学演習、理学療法学セミナー

■社会的活動：公益社団法人愛知県理学療法士会職能局予防事業推進部部長、名古屋市中区地域包括ケア推進会議介護予防部会部会長

### ■主な著書・論文など

- ・ Hayashi T, Umegaki H, Makino T, Huang CH, Inoue A, Shimada H, Kuzuya M, Combined Impact of Physical Frailty and Social Isolation on Rate of Falls in Older Adults. *The journal of nutrition, health & aging* 24(3), 312-318, 2020
- ・ 林尊弘, 竹田徳則, 加藤清人, 近藤克則：通いの場参加後の社会参加状況と健康情報・意識に関する変化：JAGES 通いの場参加者調査. *総合リハビリテーション*, 47(11), 1109-1115, 2019
- ・ Hayashi T, Umegaki H, Makino T, Cheng XW, Shimada H, Kuzuya M, Association between sarcopenia and depressive mood in urban-dwelling older adults: A cross-sectional study. *Geriatrics & Gerontology International*, 19(6), 508-512, 2019
- ・ Hayashi T, Kondo K, Kanamori S, Tsuji T, Saito M, Ochi A, Ota S, Differences in Falls between Older Adult Participants in Group Exercise and Those Who Exercise Alone: A Cross-Sectional Study Using Japan Gerontological Evaluation Study (JAGES) Data. *International journal of environmental research and public health*, 15(7), 1413, 2018
- ・ 林尊弘, 近藤克則：地域づくりによる介護予防のエビデンス. *総合リハビリテーション* 44(4), pp1-7, 2016
- ・ 林尊弘, 近藤克則, 山田実, 松本大輔：転倒者が少ない地域はあるかー地域間格差と関連要因の検討ー：JAGES プロジェクト. *厚生の指標* 61(7), pp1-7, 2014
- ・ Hayashi T, Kondo K, Suzuki K, Yamada M, Matsumoto D: Factors associated with falls in community-dwelling older people with focus on participation in sport organizations: The Japan Gerontological Evaluation Study project. *BioMed Research International*, 2014:537614, 2014
- ・ 林尊弘, 近藤克則：エビデンスに基づいた転倒予防プログラムの実施状況と新規要介護認定者割合との関係. *総合リハ* 41(4), pp. 359-365, 2013

## I 専門分野

運動老年学、健康支援、介護予防、作業療法学

## II キーワード

高齢者、運動、体力、認知機能

## III 研究テーマ

1. 地域における高齢者の健康づくりに関する研究
2. 高齢者の身体機能と認知機能に関する研究

## IV 研究紹介

1. 加齢に伴い身体機能が低下し、そのことが生活障害や転倒の原因になることが明らかとなっています。そのため、運動による取り組みが行われています。

私は、地域での公民館などを利用した集団で取り組める運動の効果について研究をしています。これまで東海市、東海市社会福祉協議会と協力し運動教室を実施し、教室での効果は示されてきています。現在は教室終了後の対象者の身体機能や生活状況、効果に影響する要因などについて検討しています。

2. 高齢者は、身体機能のみではなく認知機能も低下することが明らかとなっています。認知機能の低下を予測するのは、認知機能検査や生活状況調査などが主となっています。しかし、近年では、身体機能と認知機能に関連があることも示されています。このことから、運動教室などにおける身体機能測定を通して認知機能の判定や低下の予測ができないか検討しています。

## 【参考】

■プロフィール：沖縄県那覇市生まれ、平成医療専門学校作業療学科卒業、名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科博士前期課程修了（修士：生体情報）、2003年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻教勤務

■担当科目：運動学Ⅰ・Ⅱ、運動学実習、作業療法評価学実習、身体障害作業療法学Ⅱ、地域作業療法学演習、作業療法学研究法演習

■社会的活動：知多市障害者自立支援認定審査会委員、愛知県作業療法士会現職者研修委員長

### ■主な著書・論文など

- ・高齢者を対象に家庭型を併用した地域型レジスタンス運動の体力への効果、臨床作業療法 5, p549-555, 2012.
- ・転倒予防のためのバランス運動の理論と実際、有限会社ナップ、2010年、共著.
- ・高齢女性における下肢レジスタンス運動とバランス運動の体力への効果. 星城大学リハビリテーション・システム開発研究所研究紀要 4, p67-74, 2009年、共著

## I 専門分野

発達障害作業療法、特別支援教育、乗馬療法、医療者のコミュニケーション

## II キーワード

発達期の障害、作業療法、特別支援教育、乗馬療法、療法士のコミュニケーション

## III 研究テーマ

1. 特別支援学校教員と作業療法士の連携
2. 乗馬療法

## IV 研究紹介

1. 特別支援学校の教員は障害のある子どもに対し試行錯誤しながら教育しています。作業療法士が助言し、教員が障害の特性を理解し、その特性に対する効果的な対応を知ることによって、より子どもに合った教育を実践できるようになります。このような作業療法士と学校教員との連携の効果について研究しています。
2. 乗馬による身体的、心理的、社会的な能力の向上について研究しています。健康機器の乗馬マシンと実際の馬との違いを騎乗者の筋電図や動作解析によって明らかにしました。また心理検査や社会機能検査などを使って効果を測定し乗馬の効果を検証しました。

## 【参考】

- プロフィール：東京都生まれ、信州大学医療短期大学部、放送大学、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科卒業。博士(医学)。リハビリテーションセンター、病院、放課後等デイサービス、特別支援学校での作業療法、専門学校教員を経験し2018年より星城大学リハビリテーション学部講師。
- 担当科目：発達障害作業療法学、発達障害作業療法学演習、特論(発達障害作業療法)、地域作業療法学、地域リハビリテーション学演習、作業療法学研究法演習
- 社会的活動：日本作業療法士協会、日本感覚統合学会、日本スポーツ医学会、愛知県作業療法士会に所属。全国障害者馬術大会役員、国体役員等を経験。
- 主な著書・論文など
  - ・作業療法士が教えるホースセラピー、青葉出版, 2015
  - ・Confidence in communicating with patients with cancer mediates the relationship between rehabilitation therapists' autistic-like traits and perceived difficulty in communication, Palliative and Supportive Care, 21, 1-9, 2018, 筆頭著者
  - ・Low Cancer Screening Rates among Japanese People with Schizophrenia: A Cross-Sectional Study. Tohoku J Exp Med, 244 (3), 209-218, 2018, 共著
  - ・Cancer screening participation in schizophrenic outpatients and the influence of their functional disability on the screening rate: A cross-sectional study in Japan, Psychiatry Clin Neurosci, 71(12), 813-825, 2017, 共著
  - ・Emotional Intelligence and its Effect on Pharmacists and Pharmacy Students with Autistic-like Traits, Am Pharm Educ, 81(4), 74, 2017, 共著
  - ・Depressive symptoms and regional cerebral blood flow in Alzheimer's disease, Psychiatry Res, 221(1), 86-91, 2014, 共著
  - ・特別支援学校の教員と作業療法士による事例検討会の試み, 作業療法 37(1), 2018, 筆頭著者
  - ・乗馬活動がもたらす心理的効果、作業療法ジャーナル, 52(2), 2017, 筆頭著者
  - ・障害者乗馬とリハビリテーション【4】障害者乗馬での作業療法士の役割(解説), 臨床作業療法, 青海社, 2000

## I 専門分野

臨床心理学、神経心理学、老年心理学

## II キーワード

心理、高齢者、認知症

## III 研究テーマ

1. 認知症予防プログラムの開発と効果検証
2. 認知症の早期診断法の開発

## IV 研究紹介

1. 地域在住高齢者を対象とした認知症予防プログラム介入試験を実施しています。介入前後に、認知機能・身体機能・心理社会機能・身体組成・身体活動量・血液バイオマーカー・脳イメージングといった多面的な検査を行うことで、プログラム効果の機序（メカニズム）を明らかにしようとしています。これら解析結果を元に、さらに有効性の高い認知症予防プログラムの構築を目指します。
2. 病院もの忘れ外来受診患者さんの認知機能および脳画像データの解析をしています。心理学・脳科学の学際的観点から、認知症がより早期かつ適切にスクリーニングできる方略の開発を目指しています。

## 【参考】

- プロフィール: 愛知県生まれ、名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了、2017年より星城大学講師、博士(医学)、臨床心理士、公認心理師
- 担当科目: 心理学 / 健康心理学 / 人間発達学 / 臨床心理学 / 精神医学 他
- 社会的活動: 日本臨床心理士会、日本心理臨床学会、日本発達心理学会、日本老年医学会、日本認知症学会、日本認知症予防学会、The Alzheimer's Association International Society to Advance Alzheimer's Research and Treatment に所属
- 主な著書・論文など
  - 1) 山口智子(編) 牧野多恵子(分担執筆), 老いのこころと寄り添うこころ改訂版: 介護職・対人援助職のための心理学(高齢者のアセスメント・もの忘れ外来), pp101-115・116, 遠見書房, 2017年.
  - 2) 小海宏之・若松直樹(編) 牧野多恵子(分担執筆), 高齢者こころのケアの実践 上巻 認知症ケアのための心理アセスメント(重症度や介護負担を評価するために—認知症検査・医療領域での実践—大学病院老年内科での応用実践と展望), 創元社, pp28-33・72-79, 2012年.
  - 3) Hiroyuki Umegaki, Taeko Makino, Madoka Yanagawa, Hirotaka Nakashima, Masafumi Kuzuya, Takashi Sakurai, Kenji Toba, Maximum gait speed is associated with a wide range of cognitive functions in Japanese older adults with a Clinical Dementia Rating of 0.5. *Geriatrics and Gerontology International*, 18(9), pp1323-1329, Sep.2018.
  - 4) Hiroyuki Umegaki, Taeko Makino, Kazuki Uemura, Hiroyuki Shimada, Xian Wu Cheng, Masafumi Kuzuya, Objectively measured physical activity and cognitive function in urban-dwelling older adults. *Geriatrics and Gerontology International*, 18(6), pp922-928, Jun.2018.
  - 5) Taeko Makino, Hiroyuki Umegaki, Yusuke Suzuki, Madoka Yanagawa, Zen Nonogaki, Hirotaka Nakashima, Masafumi Kuzuya, Relationship between small cerebral white matter lesions and cognitive function in patients with Alzheimer's disease and amnesic mild cognitive impairment, *Geriatrics and Gerontology International*, 14(4), pp819-26, Oct.2014.

## I 専門分野

理学療法学、健康支援学

## II キーワード

膝蓋骨可動性評価、脳血管障害者、Myokine、臨床実習

## III 研究テーマ

1. 膝蓋骨可動性評価
2. 脳血管障害者における運動効果
3. 理学療法士教育

## IV 研究紹介

1. 膝蓋骨の可動性評価は確立されたものではありません。しかし、臨床では膝蓋骨可動性評価は重要であると多くの臨床家は認識しています。膝蓋骨可動性の評価手法、基準値等の確立を行い、より科学的な治療に繋がる研究を実施しています。
2. 脳血管障害者は、麻痺があるため限られた運動しか行えません。また、その限られた運動においても健常者のような明確な強度の指標はありません。我々は、脳血管障害者における運動の効果を、Interleukin-6 (IL-6)を始めとする Myokine の観点から解明すべく研究に取り組んでいます。また、今後は脳血管障害者のみならず高齢者においても簡単に、長く続けられる運動の効果検証に取り組みたいと考えています。
3. 臨床実習は、実践力を持つ理学療法士の輩出に欠かせない卒前教育です。限られた期間で社会に求められる理学療法士を育成するために、効果的・効率的な実習形態を確立する必要があります。それらを客観的指標に基づいて検証を行っています。

## 【参考】

- プロフィール：岐阜県生まれ、星城大学リハビリテーション学部卒業、理学療法士、社会医療法人黎明会北出病院勤務、和歌山県立医科大学医学研究科修士課程修了（医科学）、和歌山県立医科大学医学研究科博士課程に在籍、2013年から星城大学リハビリテーション学部勤務
- 担当科目：「生理学実習」/「理学療法技術演習Ⅰ」/「運動器障害理学療法学実習」/「理学療法評診臨床実習」等の補助
- 社会的活動：日本理学療法士協会会員、愛知県理学療法士協会会員、日本体質医学会会員、日本RAのリハビリ研究会会員、星城大学リハビリテーション研究会代表世話人、星城大学同窓会理事
- 主な著書・論文など
  - ・Ota S, Ohko H. Sex differences in passive lateral and medial patellar mobility in healthy young adults. J Back Musculoskelet Rehabil. 2017 Sep 8.
  - ・大古拓史, 梶原史恵, 熊川景子, 大川裕行. 頸髄損傷者の生活習慣病予防にむけた競技および日常生活活動量と栄養摂取状況に関する調査. 日本障害者スポーツ学会, 第25号, P. 59-62, 2017年
  - ・Ohko H, Umamoto Y, Yasuoka Y, Kojima D, Kinoshita T, Tsuboi H, Sakata T, Nishimura Y, Nakamura T, Fujiwara H, Tajima F. Stable plasma interleukin-6 levels 40-min after walking exercise in patients with cerebrovascular accidents. 日本体質医学会雑誌. 第75巻1号: P18-25. 2013.
  - ・Tsuboi H, Nishimura Y, Sakata T, Ohko H, Tanina H, Kouda K, Nakamura T, Umezu Y, Tajima F. Age-related sex differences in erector spinae muscle endurance using surface electromyographic power spectral analysis in healthy humans. Spine J. 13(12): 1928-33, 2013.



## I 専門分野

理学療法学

## II キーワード

変形性膝関節症、糖尿病、高齢者、運動機能、姿勢、呼吸、サルコペニア、起立性低血圧、介護予防

## III 研究テーマ

1. 糖尿病が併存する人工膝関節全置換術後患者の長期経過と最適な介入方法の効果検証

## IV 研究紹介

1. 変形性膝関節症（膝 OA）と糖尿病は互いの疾患のリスクを高めます。末期膝 OA 患者において、症状が軽減しない場合には人工膝関節全置換術（TKA）等の手術の適応となります。TKA は、膝痛の改善や身体機能・身体活動量の向上に有効であるといわれていますが、糖尿病が併存する TKA 患者を対象に TKA 前後で糖尿病指標を比較した研究では、膝機能や身体機能、質問紙で評価した身体活動レベルは向上しましたが、糖尿病指標は変化しなかったと報告されています。その理由として、身体活動量増加に焦点を当てた介入をしておらず、糖尿病指標改善が見込まれる強度の活動をしていないことが考えられます。本研究の目的は糖尿病が併存する TKA 後患者に対する効果的な介入を検討するために、TKA 後の膝機能・身体機能・身体活動量・糖尿病指標等を長期にわたって調査し、糖尿病の改善に関連する項目を検討すること、効果があると考える運動介入方法の効果検証を行うことです。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、名古屋大学医学部保健学科理学療法学専攻卒業、吉備国際大学大学院通信制保健科学研究科理学療法学専攻修了、2014 年より星城大学助手、2017 年より星城大学助教
- 担当科目：理学療法学評価診断学・実習、内部障害理学療法学実習、理学療法学研究法演習・特論
- 社会的活動：NPO 法人愛知県理学療法学会学術誌部員、東海市「呼吸ラクラク教室」講師
- 主な著書・論文など
  - ・ Ota S, Fujita R, Ueda M, Aimoto K, Nakanishi A, Suzuki Y. Sex differences in the correlation between restricted ankle dorsiflexion and knee joint biomechanics during gait -Focus on the Knee Adduction Moment-. *Biomed J Sci & Tech Res* 23(4):17578-17586, 2019.
  - ・ 藤田玲美, 松井康素, 太田進, 河村顕治, 元田弘敏, 齋藤圭介, 原田敦. 変形性膝関節症患者における呼吸機能と姿勢との関連. *理学療法学* 45(3):166-174, 2018.
  - ・ Ikemoto-Uezumi M, Matsui Y, Hasegawa M, Fujita R, Kanayama Y, Uezumi A, Watanabe T, Harada A, Poole AR, Hashimoto N. Disuse Atrophy Accompanied by Intramuscular Ectopic Adipogenesis in Vastus Medialis Muscle of Advanced Osteoarthritis Patients. *Am J Pathol* 187(12):2674-2685, 2017.
  - ・ Fujita R, Matsui Y, Harada A, Takemura M, Kondo I, Nemoto T, Sakai T, Hiraiwa H, Ota S. Does the Q - H index show a stronger relationship than the H:Q ratio in regard to knee pain during daily activities in patients with knee osteoarthritis? *J Phys Ther Sci* 28(12): 3320-3324, 2016.
  - ・ Ota S, Goto H, Noda Y, Fujita R, Matsui Y. Relationship between standing postural alignments and physical function among elderly women using day service centers in Japan. *J Back Musculoskelet Rehabil* 28(1):111-117, 2015.

## I 専門分野

作業療法学

## II キーワード

高齢者, 認知症, 栄養

## III 研究テーマ

1. 認知機能障害患者の抑うつが与える影響に関する調査
2. 超高齢患者の抑うつが与える影響に関する調査
3. 非侵襲的方法による入院患者の栄養状態評価に関する調査

## IV 研究紹介

1. 認知機能障害を有する方に抑うつが生じやすいという報告がたくさんあります。そして、抑うつは対象者の健康に悪い影響を及ぼすとされています。現在、病院で働いている方と協同して、入院されている方を対象として、抑うつが対象者にどのような影響を与えるのかを詳細に調査しているところです。
2. 近年、高齢社会の日本において、85歳以上の人口が増加することが予測されています。そのため、85歳以上の方の健康増進に関する調査の一環として、抑うつがそのような対象者に与える影響について調査しています。
3. 栄養状態は健康と密接に関係しています。しかし、客観的な栄養状態の検査は血液検査などといった侵襲的（体を傷つける）な方法が必要となっています。そこで、体を傷つけず、簡単な方法かつ客観的な栄養状態の検査方法を開発することを目的とした研究を行っています。

## 【参考】

■プロフィール：岐阜県生まれ、星城大学リハビリテーション学部卒業、2018年より星城大学助教。

■担当科目：基礎作業学、運動学演習等

■社会的活動：認知症ケア学会、日本作業療法士協会に所属

### ■主な著書・論文など

- ・”心理的介入により脳卒中後の apathy に改善を認め、ADL の回復へと繋がった一例。” 神経内科 90 (6), 2019, 共著
- ・”Relevant factors of depression in dementia modifiable by non-pharmacotherapy: A systematic review.” Psychogeriatrics 18(6), 2018, 共著
- ・”回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果。” 老年精神医学雑誌 28(8), 2017, 共著
- ・”本邦における認知症の BPSD に対する非薬物療法の現状と課題。” 認知症ケア学会誌 16(2), 2017, 共著

#### I 専門分野

手の外科分野におけるリハビリテーション、作業療法学

#### II キーワード

ハンドセラピー、手の機能と評価、手の怪我、上肢の回復

#### III 研究テーマ

1. 手の回復について評価法に関する研究

#### IV 研究紹介

1. 手を怪我したり、脳卒中などの病気によって手が麻痺をしてしまうと、今まで当たり前のように使えていた手が、使えなくなってしまうことがあります。作業療法士は、そのような患者さんに、その手が最大限に使えるようにリハビリテーションを提供します。ただ、人間の手というのは、足や他の臓器に比べると、その役割は非常に多岐に渡り、職業や趣味などによって、どんな動きや力が必要なのかはとても個人差があります。その為、私達医療者が考える回復と患者さんが求める手の回復に、時に乖離が見られることも生じます。作業療法士として、患者さんが本当に必要な動作の為の手の回復とは何なのか、真に使えるようになったと実感出来るようなアプローチ方法及びその効果を検証する研究をしています。

#### 【参考】

- プロフィール：愛知県岡崎市生まれ、日本福祉大学高浜専門学校作業療学科卒業、愛知県厚生農業共同組合連合会安城更生病院勤務、Eastern Washington 大学作業療法修士課程卒業、2019年より星城大学リハビリテーション学部作業療法学専攻助教
- 担当科目：義肢装具学実習、身体障害作業療法学 I
- 社会的活動：日本作業療法士協会、日本ハンドセラピー学会、NPO 法人ハンドフロンティア、愛知県作業療法士協会所属
- 主な著書・論文など
  - ・竹内佳子,谷口しのぶ,壁谷恵理,引田みのり,岡野昭夫：橈骨遠位端骨折術後早期運動群と固定群の比較及び ADL に影響する因子の検討.日本ハンドセラピー学会誌, 6, 3-8, 2013.
  - ・竹内佳子,谷口しのぶ,壁谷恵理,引田みのり,浦田士郎：ある電撃症例における筋電義手の有用性・能動・筋電義手の操作性の比較から-. 愛知作業療法, 13, 10-13, 2005

# 経営学部

## I 専門分野

教育カウンセリング、教育心理学、教育社会学、家族関係論、キャリア教育論、女性史・ジェンダー論

## II キーワード

育てるカウンセリング、キャリア形成、母子・父子関係、自己・他者理解、コミュニケーションスキル

## III 研究テーマ

1. 思春期クライシス
2. 母子関係・父子関係
3. 予防的開発的学校カウンセリング
4. ジェンダーと進路指導
5. 子育て支援
6. 男女共同参画

## IV 研究紹介

1. 愛着関係の有無と思春期クライシス：各発達段階に於ける愛着関係のありようが如何に人格形成に関わるのか、とりわけ思春期通過との関連性を、面接による聞き取りを通して調査している。
2. 教育によるカウンセリングのあり方：カウンセリングの思想と手法による学級経営・生徒指導・授業運営への対応により、「教師」による学校カウンセリングの在り方を調査研究している。
3. アイデンティティ形成とキャリア教育：「描画法」と「来談者中心カウンセリング」の組み合わせにより、語りに寄り添い続けることで、思春期に於けるキャリア意識確立のための手法を提示した。

## 【参考】

■プロフィール：上級教育カウンセラー、ガイダンスカウンセラー・京都市出身、京都大学教育学部研修員修了、京都市教育委員会教育相談総合センター指導主事カウンセラー、2007年から星城大学経営学部教授、京都市子育て支援総合センタースーパーバイザー、

■担当科目：教育相談、生徒指導論、特別活動、女性経営者論； 学生相談室カウンセラー

■所属学会：日本教育カウンセリング学会、日本教育心理学会、日本労務学会、日本地域資源開発経営学会（理事）、立命館大学日本文学会

■社会的活動：日本教育カウンセリング協会 スーパーバイザー、京都市学校教育相談研究会顧問、京都市子育て支援総合センタースーパーバイザー、

## ■主要著書・論文

- ・『“育てるカウンセリング”による教室対応全書』2003年、図書文化社、共著
- ・「告発から解放へ・生育歴に悩む母親の子育て相談」2003年、京都市『研究紀要』、単著
- ・「“よい子”の不登校を巡って」2004年、京都市教育相談総合センター『研究紀要』単著
- ・「進路選択と決定に寄り添って」2005年、同『研究紀要』単著
- ・「心に響く“キャリアカウンセリング”のための一試行」2006年、同『研究紀要』、単著
- ・「父が気付けば：学校・家庭・専門機関の連携」2007年、同『研究紀要』、単著
- ・「女子中学生に見る、職業意識の形成」2008年、同『研究紀要』、単著
- ・「孤独な子ども・親・家族」2008年、家庭裁判所会報6月号所収、単著
- ・「思春期におけるキャリア教育の進め方：カウンセリングの理論と技法によるアプローチ」2011年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・「カウンセリングによるキャリア教育の試み：進路に悩む高校生の語りに同伴して」2012年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・「虐待の連鎖を断ち切って：語ることと聴くことの力」2013年、星城大学『人文研究論叢』第7号、単著
- ・「男女共同参画、今・むかし～梁川香蘭と江馬細香～」2015年、『中部経済新聞』
- ・「陶淵明の妻の悲しみ～150万円と『内助の功』」2016年、『中部経済新聞』

・学会賞：「サイエンティストプラクティショナー」2013年、日本教育カウンセリング学会

## I 専門分野

経営学 (特に経営戦略論)、エネルギー・環境政策, 経済政策

## II 研究テーマ

1. Future Smart Energy System-Roadmap to CO2 ZERO Emission-  
(次世代エネルギーのシステム構築に向けてー持続可能性, 経済性, 安定性を目指してー)
2. エネルギー市場、3. 自動車の電動化に対応したシステム構築と地域産業等

## III 研究紹介

1. 地球温暖化は待ったなしのグローバルな課題。わが国は率先して、21世紀末までに温室効果ガスの排出をゼロにする「パリ協定」の目標を達成しなければならない。そのために、まず、電力分野は、早期に風力, 太陽光等の再生可能エネルギー中心の発電構成にシフトとし、2050年頃までに、CO2排出をゼロとするシステムとする。輸送分野では、EV等電動車の大量導入、充電スタンド等インフラ整備、産業、建物分野では、工場の電化、ゼロエミッションビルディングの導入、RE100の展開等により、2050年頃までにCO2排出をゼロとするシステムとする。天然ガスの活用は再生可能エネルギー100%社会が実現するまでのつなぎと考え、電化社会、水素社会と整合をとったものとする。わが国は、早い段階にパリ協定の目標を達成し、電化・水素活用等エネルギー連携の促進等を通じて、北東アジア圏、グローバルレベルでの目標達成に貢献していく。

## 【参考】

■プロフィール: 三重県津市出身、早稲田大学理工学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程修了(経済学博士)、財団法人国際超電導産業技術センター主任研究員、中部電力株式会社本店工務部、技術開発本部、四日市電力センター所長、知的財産グループ長等を経て、2009年から星城大学経営学部教授、2010年から独立行政法人・新エネルギー産業技術総合開発機構(NEDO)技術委員、北東アジアガス&パイプラインフォーラムメンバー、2013年から(社)日本プロジェクト産業協議会・天然ガスインフラ整備活用委員会委員(終身)、2018年からA Jury member of IEA ISGAN AWARD (International Energy Agency International Smart Grid Action Network AWARD)

■担当科目: 経営学原理、コーポレート・ガバナンス、経営組織論、経済政策

■社会的活動: 日本経済政策学会理事、日本経営学会、組織学会、公益事業学会、日本エネルギー学会等、日本エネルギー経済研究所学術会員、NEDOスマートコミュニティ・アライアンスメンバー、NEDOピュアレビュアー、東海市緑化審議会会長等

## ■主な著書・論文など

- ・「規制緩和下における電力会社の戦略」2005年『日本経営学会誌』第14号、単著
- ・「電力会社の多角化戦略」2006年『日本経営学会誌』第18号、単著
- ・「電力会社の通信事業戦略」2008年『経済科学』55巻、単著
- ・「持続的な競争優位の確保に向けた都市ガス会社の戦略ー規制緩和への対応から国際展開へ」2008年、『公益事業研究』60巻第1号、単著
- ・「総合エネルギー企業を目指した電力会社の戦略ーグローバル戦略構築に向けてー」2009年『公益事業研究』60巻第4号、単著
- ・「エネルギー企業の経営」2010年『公益事業研究』61巻第4号、単著
- ・「スマートコミュニティ実現に向けて」2011年『公益事業研究』63巻第1号、単著
- ・「天然ガスと再生可能エネルギーを中心としたエネルギー活用と今後の電力会社の企業形態」2014年『公益事業研究』65巻第3号、単著
- ・「EUのエネルギー政策から学ぶ日本の電力システム改革への示唆」, 2018年『経済政策ジャーナル(勁草書房)』第13巻第1・2号、単著.
- ・「日本の天然ガス利用と北東アジアにおける連携」, 2018年『経済政策ジャーナル』第14巻第1・2号、単著.

## I 専門分野

国際関係学、文化経済論、コンテンツ産業論

## II キーワード

娯楽産業、産業集積、テレビゲーム

## III 研究テーマ

1. 娯楽の消費場面の変遷（テレビゲーム、パチンコ等）に関する研究
2. コンテンツ産業における国際競争力の源泉に関する研究

## IV 研究紹介

1. 4マス時代と呼ばれる、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌が情報流通の中核を担った時代は、インターネットの登場によって大きく変容しつつあります。これにより、文化や芸術、娯楽に対する接触機会も20世紀とは異なる経路をたどることとなりました。この研究では、日本における大衆的な娯楽として独自の発展形態を遂げてきたテレビゲームとパチンコを題材に、選択的消費が進む娯楽市場の歴史的変遷から、その将来像を読み解くことが課題です。
2. 産業振興を実現する経路はケースバイケースですが、一つの方法論に、地方が独自に蓄積してきた知的資源の活用があります。私が専門にしてきた北欧では、10万人程度の規模の都市で次々とベンチャー企業を生み出し、世界でも有数の産業集積を実現させている地域があります。このような産業集積はどのような取り組みによって可能になるのか？をテレビゲーム産業を具体例として研究しています。また、もうひとつのアプローチとして、特定の地方ではなく、動画サイトなどの消費者生成メディア（CGM）を活用する方法もありえます。クリエイター発・ユーザー発のコンテンツが蓄積することが娯楽産業のありようをどう変えつつあるのかを、各国比較を通じて研究しています。

## 【参考】

■プロフィール：静岡県三島市生まれ、立命館大学大学院国際関係学研究科 博士課程修了

■担当科目：環境情報論、環境経営論、日本経済論

■社会的活動：東海市行政改革推進委員会、東浦町社会教育委員ほか

### ■主な著書・論文など

<論文>

- ・「グローバリゼーションのなかのビデオゲーム：フィンランドにおけるゲーム産業振興の現状と課題」、『国際言語文化研究 24(2)』2012年、単著
- ・「デジタルゲームを活用したシリアスゲームによる経営学教育実践の試行」、『日本情報経営学会第61回大会予稿集 61』2010年、共著
- ・「e-Universityにおける教学用ICTシステムの支援ツール」『星城大学経営学部研究紀要 8』2009年、単著
- ・“Pachinko: A game studies perspective”, Kinephanos (2015), 共著, in printing.

<招待講演・口頭発表>

- ・“Japanese game software industry for mobilephone/smartphone.” フィンランド国家技術庁 (Learning Solutions programme) セミナー、2012/02/27
- ・“General situation of digital serious games in Japan” ヘルシンキ大学 CICERO ラーニング特別セミナー、2012/02/28
- ・“Pachinko: Evolution in parlour and in video game.” (2015), CGSA 2015 Annual Conference, 2015/06/04
- ・“Pachinko: Adaptation in the Game Industry”, (2013) International Conference on Japan Game Studies, 2013/05/25

#### I 専門分野

流体力学、計算理工学、空気調和工学

#### II キーワード

水や空気の流れ、気流シミュレーション、乱流、直接数値シミュレーション、Web、サーバーサイドプログラミング

#### III 研究テーマ

1. 一様等方性乱流場の統計理論
2. 授業研究 (大学教育における授業分析)

#### IV 研究紹介

1. たとえば、物品の貸出管理システムや、ネットワークカメラを利用した施設利用管理システムなど、ゼミの学生と Web で動作するアプリケーションを制作。
2. 授業研究。
3. 乱流場を数値シミュレーションで再現し、乱流の統計的性質を調べる。

#### 【参考】

■プロフィール：東京都立大学理学部物理学卒業、名古屋大学大学院工学研究科博士前期課程修了、名古屋大学博士（工学）取得。三菱電機株式会社（住環境システムエンジニアリングセンター、冷熱システム製作所）、星城大学経営学部助手・講師を経て、2011年より星城大学経営学部准教授。

■担当科目：科学的思考、HP コンピューティング、エンドユーザーコンピューティング

■社会的活動：東海市ひとづくり協議会委員

■主な著書・論文など

- ・ Mohammad Reza Sarkar Arani, Takenobu Fukaya, Yoshiaki Shibata, Takaki Ishida ,” Changing University Concept of Learning: Lessons Learnt from a Lesson Study at Collegiate-level of Education ,” Proceedings of the WALS2011 (2011), Japan, November
- ・ T. Ishida , “Lesson Study as a Model of Improving Teaching: Focus on Collegiate-Level of Education ,” Proceedings of the WALS2010 (2010), Brunei, December
- ・ P. A. Davidson, T. Ishida and Y. Kaneda ,”Linear and Angular Momentum Invariants in Homogeneous Turbulence ,” Proceedings of the IUTAM Symposium on Computational and New Perspective in Turbulence(2008), Nagoya, Japan, September, pp11-14
- ・ T. Ishida and Y. Kaneda , “Small-scale anisotropy in magneto- hydrodynamic turbulence under a strong uniform magnetic field ,” Phys. Fluid 19 , 075104 (2007)



## I 専門分野

教職論、教育原理、教育方法論、生徒指導、特別支援教育

## II キーワード

特別支援教育、インクルーシブ教育システム、ユニバーサルデザイン、合理的配慮、ハテナソン（質問づくり）、知的障害特別支援学校学習指導要領、文部科学省著作本

## III 研究テーマ

1. 教職課程の授業内容、方法等について実践を通して検証し、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業等の在り方を明らかにする。
2. 大学における学びの「合理的配慮」に関して、実践を通して考察する。

## IV 研究紹介

1. 平成 29 年に学校教育法の一部を改正する省令が制定され、令和 2 年度より順次、小学校（特別支援学校小学部）、中学校（特別支援学校中学部）、高等学校（特別支援学校高等部）において新しい学習指導要領が施行されます。（幼稚園は平成 30 年度より）そこに示されている「主体的・対話的で深い学び（「アクティブラーニング」）の視点からの授業改善を大学の授業において実践を通して検証していきたいと思っています。特に、質問づくり（QFT）・ハテナソンの実践を通して研究していきます。
2. 平成 28 年 4 月、障害者差別解消法が施行されました。この法律は、障害のある人びとへの差別をなくすことで、障害のある人もない人も共に生きる社会をつくることを目指しています。合理的配慮とは、「障害者から何らかの助けを求める意思の表明があった場合、過度な負担になり過ぎない範囲で、社会的障壁を取り除くために必要な便宜のことである。」と書かれていますが、「障害者」と一括りにするのではなく、困り感を抱えている一人一人の人、学生が配慮を受け、自分らしい学生生活を送れるようにと願うものです。そのために、今、何が必要なのか、何ができるのかということについて考えていきたいと思っています。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県江南市生まれ、四日市市在住。愛知教育大学教育学部特殊教育科技体不自由教員養成課程卒業。愛知県立佐織特別支援学校校長、愛知県立名古屋特別支援学校校長。平成 28 年 4 月から現職。
- 担当科目：教育実習、教育原理、自分づくりゼミ、総合基礎演習、生徒指導、教職論、教育方法論、ボランティア演習など
- 社会的活動：自閉症スペクトラム学会会員、日本LD学会会員、日本特殊教育学会会員、愛知県委嘱特別支援教育モデル事業の評価専門員、名古屋市特別支援学校アドバイザー、愛知県立いなざわ特別支援学校評議員、愛知県立瀬戸つばき特別支援学校評議員、愛知県立特別支援学校 5 年経験者研修講師
- 主な著書・論文など
  - ・『特別支援学校 新学習指導要領の展開』、明治図書出版、共著、平成 30 年
  - ・『知的障害特別支援学校の『家庭』指導』、ジアース教育新社、監修、平成 27 年
  - ・『特別支援学校のセンター的機能 -全国の特色ある 30 校の実践事例集-』、ジアース教育新社、共著、平成 23 年
  - ・『さんすう☆☆さんすう☆☆さんすう☆☆ 教科書解説』、文部科学省、委員執筆、平成 23 年
  - ・『特別支援教育 改訂指導要録の実際と文例集』、明治図書、共著、平成 22 年
  - ・『新学習指導要領 ポイントと授業作り特別支援教育』、東洋館出版、共著、平成 22 年
  - ・『特別支援学校 教育要領・学習指導要領』、『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚園・小学部・中学部）』文部科学省、作成協力者・執筆、平成 21 年

## I 専門分野

情報工学、経営工学

## II キーワード

IT 経営、要求・要件定義、IT コーディネータ制度、中小企業、IT 投資

## III 研究テーマ

1. 経営と IT 技術をつなぐコンサルティング
2. IT コーディネータの実践的活用法

## IV 研究紹介

1. IT 経営を進める上で必要となる経営サイドからの要求定義と、システム化に必要な要件定義をどのように取り纏めるかは、その情報システム開発の成否に直結する重要なプロセスです。本テーマでは、この要求・要件定義を効率的に取り纏めるための、経営と IT 技術をつなぐコンサルティングについて、具体的なシステムを取り上げて事例研究を行うものです。
2. 経済産業省が 2001 年からスタートした IT コーディネータ制度は、その制度の定着と合わせ IT コーディネータの資格保有者も約 6,500 人に達しています。また、全国各地には活動拠点となる NPO 法人も多数発足して、地域での密着した活動が展開されています。一方、中小企業を取り巻く経営環境は急速に変化してきており、この IT コーディネータ制度を十分活用しきれていない現状があります。本テーマでは、こうした中小企業にとって真に経営に役立つ IT 投資を推進するための、IT コーディネータの実践的活用法について研究するものです。

※中小企業の IT 化推進や IT 経営に関心をお持ちの方は、気軽にお問い合わせ下さい。

## 【参考】

- プロフィール：岐阜県出身、福井大学大学院工学研究科博士後期課程修了。日立エンジニアリング(株)ソフト開発システム部長、同情報システム本部シニアエキスパート、福井高専教授を経て、2011 年から星城大学教授。博士(工学)、技術士(情報工学・経営工学・総合技術監理)。
- 担当科目：e ビジネス論、電子決済論、経営情報論、ビジネスモデル論、IT 経営実践セミナーなど
- 社会的活動：日立技術士会広報委員、情報処理学会北陸支部評議員、福井県内各種委嘱委員、東海市委嘱委員などに従事。日立技術士会、日本技術士会、情報処理学会、電気学会に所属。
- 主な著書・論文など
  - ・「統計的品質管理」2014 年、オーム社編『技術士ハンドブック第 2 版』5・5 章、単著
  - ・"Kana-to-kanji conversion method using Markov chain model of words in bunsetsu" *Proc. 2010 4th International Universal Communication Symposium*, 2010, 共著
  - ・「かな単語マルコフ連鎖モデルを用いたかな漢字変換法」2010 年、電気学会編『論文誌 C』130 巻 6 号、共著
  - ・"An Evaluation of New Method to Convert Non-segmented kana Strings to kanji-kana Strings Using Markov Chain Model" *Proc. International Conference on Electrical Engineering 2008*, 2008, 共著
  - ・「統計的品質管理」2006 年、オーム社編『技術士ハンドブック第 1 版』5・4 章、単著
  - ・「IT 専門家を徹底活用」2003 年、茨城新聞社編『元気の出る中小企業経営』第 2 章 4 節、単著
- その他
  - ・関連保有資格：情報処理技術者(第一種・特種)、ITC 協会認定 IT コーディネータ、経営品質協議会認定セルフアセッサ
  - ・JETRO 活動：1997 年度輸入商品発掘専門家(ソフトウェア)、2002~2003 年度国際テクノビジネスフォーラム・コーディネータ(IT 分野)

## I 専門分野

言語、英語、宗教、教養教育、経営と女性

## II キーワード

英語、教養教育、市民性、徳性、キリスト教、多数派と少数派

## III 研究テーマ

1. 日本を発信する英語
2. 多数派と少数派の共生・協働に関する事項

## IV 研究紹介

1. 日本を発信する英語

グローバル化と共に、日本についてあまり知識がない人達と出会い彼等に日本を理解してもらう機会が増えました。しかも 21 世紀に於いては、百科事典的に日本的なるものについて説明するだけでなく、複雑な事項について簡潔に、的確に論じなければなりません。グローバル世界の中で英語を用いつつどのように自国の文化を発信するべきなのか検討しています。

2. 多数派と少数派の共生・協働に関する事項

多数派と少数派の関係は、しばしば後者が前者の抑圧を打破するという形で語られますが、現実はそのように単純ではないでしょう。例えば日本語は世界的には少数派ですが日本国内では多数派です。キリスト教は世界的には多数派ですが日本国内では少数派です。多数派・少数派間の複雑な緊張解決として、共生・協働を提案しています。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、南山大学外国語学部英米学科(学士)、タラム大学大学院(修士)、ニューカッスル大学現代言語研究科専任講師(日本語)、名古屋明德短期大学英語科助手・講師・助教授、星城大学経営学部助教授・准教授を経て、2020年から星城大学経営学部教授。2016年より星城大学学長補佐。2016年～17年国際センター長、2018年～20年6月女性活躍推進担当。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、ゼミナールⅢ・Ⅳ、総合基礎演習Ⅰ・Ⅱ

■社会的活動：東海市土地開発公社情報公開審査会会長、  
東海市公の施設の指定管理者選定委員会委員

## ■主な著書・論文など

- ・「日本におけるキリスト教伝道に関する一考察—清里の父ポール・ラッシュの伝道成果をヒトとして—」 『星城大学 研究紀要 No.20』 2020年(単著)
- ・“On the ‘Japanese-ness’ as a change facilitator, a diversity holder and a society sustainer,” *The 11th International Workshop on Regional Innovation Studies 2019 and The 11th Taiwan-Philippines-Japan International Academic Conference 2019*, pp. 119-122, 2019年(単著)
- ・「続 インターネットの言語空間における『グローバル社会』に抗する者たちの連携—グローバル化とグローバル主義の違いに着目して—」 『星城大学 研究紀要 No.18』 2018年(単著)
- ・“Unnoticed Cultural Diversity in Japan,” *The 9th Taiwan-Philippines-Japan Academic Conference: Sustainable Tourism Proceedings*, pp.249–268, 2017年(単著)
- ・「インターネットの言語空間におけるグローバル社会に抗する者たちの連携—英国 EU 離脱と米国大統領選挙を手掛かりに読み解く—」 星城大学『研究紀要 No.17』 2017年(単著)
- ・「血盟団事件、千年王国、キリスト教左派」 星城大学『研究紀要 No.16』 2016年(単著)
- ・「日本基督教界における政治活動偏重のもたらす問題性」 星城大学『研究紀要 No.14』 2014年(単著)
- ・「日本を発信する英語」 星城大学『研究紀要 No.13』 2013年(単著) (論説資料保存会『英語学論説資料』第47号採録)
- ・『キリスト教と天皇(制)』—メジニック・ジューダイズムを手掛かりに— 『星城大学 人文研究論叢 Vol.7』 2011年(単著)

## I 専門分野

地域医療、医療安全、医療の質、医療経営・管理、医学教育、社会保障、健康教育、地域防災など

## II キーワード

住民力養成、地産地消活性化、地域社会貢献活動、自治体支援など

## III 研究テーマ

1. 自治体病院支援のための ERM 導入と SRI (社会貢献投資) システムの開発
2. 地域におけるメタボリックシンドローム対策調査・啓発に関する研究
3. 医療の質・安全管理モニタリング分析システム開発と検証
4. 地域支え合い体制づくりにおけるコミュニティ・デザイン構築と効果検証
5. 激甚災害時の共助・互助醸成推進に関する研究 (ほか)。

## III 研究紹介

1. 自治体病院の 91.4% (2008 年) が赤字運営です。地域医療を担う自治体病院を継続運営するためには、内部統制は勿論、医療の質・安全管理について客観的評価を下すことのできる第三者評価機関設置、さらには、社会貢献投資 (SRI) 型自治体病院運営体制を提案したいと考えております。地域医療改革を具現化するためには、地域住民の方々の住民力 (住民の自治能力) なくして成立しません。地域の皆さんと一緒に取り組んでいきたいと思っております。
2. 医療の質・安全管理体制を客観的に評価するための医療の質・安全管理モニタリング分析ツールを開発し、各医療機関に対し分析評価のフィードバックを実施しています。自治体病院支援、地域健康増進普及活動、地域医療支援に関するご相談など積極的に対応します。

## 【参考】

- プロフィール:福岡県遠賀郡岡垣町生まれ、小・中・高校時代を東海市で過ごす。九州大学大学院医学系学府医療経営・管理学専攻修士課程修了 (医療経営・管理学修士)。九州大学大学院医学系学府環境社会医学専攻医療システム学講座医学博士課程。各病院において医療安全管理部部長 (Patients Safety Manager) として医療事故調査、院内安全管理体制再構築)、公益財団法人日本医療機能評価機構、医療事故防止センター初代医療事故防止事業課長、病院長補佐 (特命任務:院内質改善、経営改善等病院再建) 歴任。現在、兼職にて社会医療法人宏潤会大同病院医療安全管理顧問、医療経営学研究所客員研究員、自治体病院再建、医療機関 5 施設において医療経営・管理顧問、オブザーバー、九州保健福祉大学保健科学部非常勤講師、藤田保健衛生大学医学部客員教授など務める。
- 担当科目:地域医療学、医療環境教育学、患者安全管理学、医療オペレーションマネジメント論、医療管理学、医療システム論、クオリティ・マネジメント論、社会保障論、メディカル・リスクマネジメント論、医療・福祉支援学、医療安全管理学特論、組織管理学特論、健康支援学特論、ほか。
- 所属学会:医療の安全に関する研究会、日本医療経営学会、日本医療・病院管理学会、医療の質・安全学会、日本医学教育学会、日本医療教授システム学会、日本航空医療学会、日本医工学治療学会、日本医療機器学会、神戸医療経営学研究会、日本医学教育学会、(財)国家基本問題研究所、ほか。
- 社会的活動:医療の安全に関する研究会常任理事、東海病院管理学研究会世話人、日本医工学治療学会代議員、NGO 国際医療協力プロジェクト副理事長、社会医療法人宏潤会大同病院顧問、地域医療支援プロジェクト代表、日本ヒューマンファクター研究所研究主幹、医療経営学研究所客員研究員等。
- 主な著書・論文など
  - ・「知多半島の地域医療をみんなで考えよう！」series community medicine ,Step 連載, 5 月号 P73、8 月号 P67 ,11 月号 P73, 2 月号 P53
  - 「医療におけるコミュニケーションと医療安全～患者安全管理の手法～」北野 達也、安全医学,Journal of Medical Safety,Vol.4(2):P17-P21,2007.11.30 ほか 103 編 (星城大学教員紹介参照)

## I 専門分野

生徒指導、教育制度論、教職論、教育課程論 英語科教育法、

## II キーワード

自己指導能力、成年年齢、情報モラル、行動連携

## III 研究テーマ

1. これからの生徒指導の在り方
2. 教員志願者の減少傾向の分析

## IV 研究紹介

1. 文部科学省の『生徒指導提要』（平成 22 年 3 月）では、生徒指導を、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動」としている。この考え方を受け、各学校においては、自己指導能力、即ち「その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行する能力」の育成を目指した教育活動の実践に努めている。

令和4年（2024年）から、民法の一部改正により、成年年齢が現在の20歳から18歳に引き下げられる。このことは、18歳、19歳の若者を「大人」として扱い、社会への参加時期を早めることを意味する。この動向を見据え、各学校は、生徒に社会・経済における様々な責任を伴った体験をさせ、「自分で考えて、決めて、実行する」機会を増やす必要がある。一方で、高等学校においては成年と未成年が混在することで生ずる課題も多く、令和4年に向けての準備は手探り状態である。こうした状況を踏まえ、より学校現場で生きる、これからの生徒指導の在り方を研究する。

2. 全国47都道府県のうち5割以上、さらに20政令指定都市のほぼ半数で、公立の小中高校の教員が定数に達していない。1970年代に大量採用された教員の退職が進む一方、教員志願者の減少が背景にあると思われる。大学の教員養成課程の入試倍率も低下し、教員の質を担保する機能を果たさなくなっている。愛知県も例外ではなく、かつては多くの教員を輩出してきた高校において、教育実習生の数が急落しているという現象が生じている。

教育の質を維持するためにも、本学の教員志願の学生への指導を通じて、教員減少の要因等について分析を進めたい。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県春日井市生まれ、早稲田大学第一文学部英文学科卒業、愛知県立高等学校教諭、愛知県総合教育センター企画研修室長、愛知県教育委員会高等学校教育課課長補佐を経て、愛知県立守山高等学校長、愛知県立刈谷北高等学校長、愛知県立千種高等学校長。愛知県公立高等学校長会理事、愛知県公立高等学校長会副会長などを歴任。2020年より星城大学教授

■担当科目：生徒指導、教育制度論、総合的な学習の時間、英語、

■社会的活動：東海地区高等学校野球連盟会長、愛知県高等学校野球連盟会長、日本教育学会

## ■主な著書・論文など

- ・「高等学校における進学指導をめぐる諸問題への対応 ―新学習指導の実施に向けて―」（2011年 愛知県公立高等学校長会研究 単著）
- ・「高大連携の現状と今後の在り方について」（2012年 愛知県公立高等学校長会研究 共著）
- ・「普通科高校における国際理解教育の現状と課題」（2013年 同上）
- ・「理数教育の充実と進学指導の在り方について」（2014年 同上）
- ・「普通科高校における新教育課程の諸課題について」（2015年 同上）
- ・「若年教員（経験年数1～5年）の育成について」（2016年 同上）
- ・「国際理解教育に思う」（2018年 愛知県高校教育七十年誌）
- ・「教職離れを考える」（2019年 愛知県公立高等学校長会誌）

I 専門分野

NPO論

II キーワード

公益法人制度改革、NPO法と寄付税制の改正、政策形成、経営学

III 研究テーマ

政策形成と非営利法人制度改革—新・政策の窓モデル—

IV 研究紹介

本研究は、わが国において公益法人制度改革と「NPO法と寄付税制の改正」が、20世紀末から21世紀初頭までの約15年間に「なぜ」そして「どのように」して実現したのかを事例研究によって説明することを目的としている。

【参考】

■プロフィール：愛知県一宮市生まれ。名古屋大学大学院経済学研究科博士課程単位修得退学、経済学博士(名古屋大学)、北海道大学大学院経済学研究科教授を経て、現在、北海道大学名誉教授。2017年4月より星城大学教授。

■担当科目：スポーツマネジメント論、スポーツ産業論、ボランティア演習、事業貢献論

■社会的活動：非営利法人研究会顧問、組織学会監事

■主な著書・論文など

- ・『企業環境と管理システム』（単著）中央経済社、1982年5月。
- ・『交通と通信の組織—インフラストラクチャーの拠点—』（共編著）第一法規、1989年9月。
- ・『非営利組織の経営—日本のボランティア—』（単著）北海道大学図書刊行会、1998年4月。
- ・『政策形成とNPO法—問題、政策、そして政治—』（単著）有斐閣、2003年11月。
- ・『戦略的協働の本質—NPO、政府、企業の価値創造—』（共編著）有斐閣、2011年5月。
- ・「公益法人制度改革における参加者の行動」（単著）『経営論集』（札幌学院大学）(6)、pp. 31-96、2014年3月。
- ・「寄付税制およびNPO法の改正過程」（共著）『経済学研究』（北海道大学）67(1)、pp. 29-107、2017年6月。
- ・「政策形成と非営利法人制度改革—新・政策の窓モデル—」（共著）『経済学研究』（北海道大学）70(1)、pp. 11-127、2020年6月。

#### I 専門分野

英語教育

#### II キーワード

英語教育、教養教育、異文化理解、キリスト教

#### III 研究テーマ

1. 大学教養教育に合致した英語教材の開発
2. 英語素材に見られる宗教的背景の分析
3. アメリカの福音主義キリスト教

#### IV 研究紹介

1. 米国 The Christian Film and Television Commission および MOVIEGUIDE® 推奨作品に見られるような“アメリカの良心”ともいうべき倫理的個人主義を涵養する英語素材に注目しています。倫理的個人主義は、米国ではキリスト教およびキリスト教と並行して存在するアメリカ“市民宗教”の価値観と合致するものです。日本の“日本の良心”ともいうべき倫理的個人主義の存在に思いを馳せつつ取り組んでおります。
2. グローバル社会および広く民主国家において求められる市民性の育成という目的に合致した英語教育の在り方を模索しています。

#### 【参考】

■プロフィール：愛知県東海市生まれ、南山大学外国語学部英米学科（学士）、南山大学外国語センターL.L. 教務助手、米国セント・マイケルズ大学大学院（TESL 修士）、名古屋明德短期大学英語科専任助手・講師・助教授、星城大学経営学部専任助教授を経て 2007 年から星城大学経営学部准教授。他に、1984-85 年国際ロータリー財団奨学生、1993 年ウィクリフ主催 SIL (Summer Institute of Linguistics) 夏期言語学講座異文化コミュニケーション・トレーニング受講(於東京羽村市東京聖書神学舎)、1995 年 ICI(Intercultural Communication Institute) 主催 SIIC(Summer Institute for Intercultural Communication)夏期異文化コミュニケーション講座受講 (於米国オレゴン州 Pacific University) など。

■担当科目：英語Ⅲ・Ⅳ、総合英語Ⅰ・Ⅱ、TOEICⅢ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、社会探索ゼミ

#### ■主な著書・論文など

- ・「座学以外の講義形式の可能性を求めて—星城大学経営学部『社会探索ゼミ』の試み」2013 年、『大学教育学会第 35 回大会要旨集録』所収、共著
- ・『TOEIC® テスト新公式問題集』Part 3 の質的分析—徳性の視点から—」2012 年、星城大学『人文研究論叢』第 8 号所収、共著
- ・「教養教育という視点から見た『TOEIC®テスト新公式問題集』」2010 年、『大学教育学会第 32 回大会発表要旨集録』所収、共著
- ・「星城大学におけるオリジナル英語教材作成および使用の試み—Hiplus for Campus を利用して」2005 年、『外国語メディア教育学会(LET)第 45 回全国研究大会・総会発表要項』所収、共著
- ・「日本人短大生と『家庭』の果たす役割～異文化ホームステイ・プログラムが提示する教育的課題」2001 年、名古屋明德短期大学『紀要』第 16 号所収、単著

## I 専門分野

コーポレートファイナンス、M&A、企業法

## II キーワード

資本コスト、企業価値評価、価値関連性、CAPM、監査役監査

## III 研究テーマ

1. 中小企業の企業価値向上への施策
2. サステナブル企業に向けた業務改革

## IV 研究紹介

### 1. 【中小企業の潜在価値の顕在化】

中小企業に存在する価値資産の多くは、それを顕在化する手段の欠如から潜在化したままです。そうした価値を評価、顕在化する具体的な方策について検討します。また、資金調達から資本政策（ベンチャー投資資金、M&A活用の出口戦略など）まで財務面からの取り組みも検討します。

### 2. 【サステナブル企業にむけた業務改革】

日本には伝統的な技術や製法を有しながら拡大路線を取らず、200年以上の歴史を有する地域型企業が3,000社以上も存在します。そのビジネス・モデルは伝統という非効率性の堅守と、現代流の効率性を追及する経営手法の両立によるいわばサステナブル・モデルです。このモデルをいかにして築くか、具体的な業務フロー、管理手法について提言を行います。

上記の内容にご関心をお持ちいただきました場合は、お気軽にお問い合わせください。

## 【参考】

■プロフィール：大手情報通信会社にて国内外の投資関連業務に従事。経済学博士。星城大学経営学部准教授（2010～）。

■担当科目：会計学、電子会計、管理会計、簿記。

### ■主な著書・論文など

- ・「会計情報を用いた持続的利益の予測可能性」京都大学経済学会モノグラフ（発行番号 200909184）
- ・「会計情報と企業価値評価モデル」-OJモデルの構造と応用可能性」中央経済社、『企業会計』Vol.61 No.3 142～148頁



I 専門分野

英語、ビジネス英語、異文化理解

II キーワード

Computer Mediated Communication、英語会話、海外留学

III 研究テーマ

1. Interaction in Language Learning Situations
2. Behavior of College Students

IV 研究紹介

1. This project took place between two groups of students. One was a group of Japanese college students, the other a class of foreign students studying English as a second language at ELI at The University of Central Florida in America. The major goal of this project was for both groups of students to become familiar with using English as a means of communication. I wanted the students from both groups to get used to speaking in English and I wanted them to have the opportunity to develop friendships with students from other parts of the world.
2. I studied the behavior of college students upon return to Japan after a year overseas in an American institution of higher learning. Integrative motivation proves quite dominant at first and then instrumental motivation seems to be stronger as time passes.

【参考】

■プロフィール: フロリダ大学大学院英文学修士課程修了。

■担当科目: 英語、英語話術、ビジネス英語、異文化理解演習、海外ビジネスセミナー。その他授業外教育として、アメリカスタディツアー、海外留学支援、ゴルフ部顧問など。

■社会的活動: 東海市しあわせ村センター英語研究会、東海市勤労センター英語研究会、アメリカ語学研修に関する調査 (University of Central Florida, Lindenwood University, Seminole State College of Florida, My Stage Australia)、全国語学教育学会 会員、Computer Assisted Language Instruction Consortium 会員、東海市国際交流協会英語スピーチフェスティバル 審査委員長、第 40 回ライオンズインターハイスピーチコンテスト 審査・講演など。

■主な著書・論文など

- ・English as an International Language 1995/11 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 9 号
- ・Difficulties of Foreign Students in U.S. Colleges 1997/3 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 12 号
- ・Why Our Schools Fail to Teach Students 1999/3 月 *Bulletin of Nagoya Meitoku Junior College* 第 14 号
- ・The Role of Women in Chaucer's "The Knight's Tale" 2006/3 月 人文研究論叢 第 2 号
- ・The Effect of Motivation on Second Language Acquisition: A Presentation of Studies 2007/3 月 人文研究論叢 第 3 号
- ・A Short Biography of John Greenleaf Whittier. 2012/3 月 人文研究論叢 第 8 号

## I 専門分野

保健体育科教育法、道徳教育研究、教職論、教育課程論

## II キーワード

保健体育科教育、道徳教育、教育実習、教職、教育課程

## III 研究テーマ

1. 学生の長所を生かし、個々の資質・能力を向上させる保健体育科教育の指導法
2. 実践的指導力の育成・豊かな人間性・資質を高める教職課程の在り方

## IV 研究紹介

1. 新しい学習指導要領において、保健体育科の基本方針は、小学校、中学校、高等学校の12年間を見通した指導内容の体系化（1まとまり4年間）を図り、指導内容の確実な定着、体力の向上の重視、基礎的・基本的な知識・技能の習得に力点が置かれています。こうした新しい方針にも配慮しながら、生きる力の中の確かな学力を育むために、保健体育科の指導法は、運動の特性をより明確にし、指導計画及び指導法の工夫や学習活動に生きる評価の在り方が求められます。

そこで、本学の保健体育科教育法の研究では、生徒一人一人を伸ばす指導のあり方に力点を置き、生徒の実態や課題意識を基に、生徒一人一人が課題に応じた練習方法や指導計画を立案できるような指導の在り方をきめ細かく追究したいと考えています。また、各運動種目に応じた学習形態の在り方や教材・教具の工夫など、より学校現場で生きる実践的な指導法の研究を進めていきます。

2. 学校の教育課程は、学校の共通の目標に向かって、児童生徒をよりよく成長させるための総合的な教育計画です。この学校運営の共通基盤となる教育課程の編成の在り方について、関係法令を基に、その編成の手順、工夫、評価などについて基礎的に学ぶとともに、中学校・高等学校現場の生の実践例を参考にしながら、特色ある学校づくりの在り方を追究していきます。より充実した教育課程の編成は、常に計画・実行・評価・改善のPDCAサイクルが有効に働き、生徒一人一人の自己実現が支援されているかにかかってきます。本学の研究では、このような生徒の立場に立った教育課程論を模索し、より実践的で学校現場で生きて働く研究に視点を置いて進めたいと考えています。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県西尾市生まれ、愛知教育大学教育学部保健体育科卒業、愛知県教育委員会指導主事、文部教官教諭、西尾市立米津小学校長、西尾市立吉田小学校長を経て、2016年より星城大学教授

■担当科目：保健体育科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、道徳教育研究、教職実践演習、教育実習、スポーツ実技Ⅰ（陸上）

■社会的活動：愛知県中小学校体育連盟西尾支所理事・副支所長・支所長、西尾市小中学校長会副会長、一色町体育協会理事（学校代表）、愛知県中小学校体育連盟理事等を歴任

### ■主な著書・論文など

- ・「2001年の扉を開く」（明治図書） 1997年、共著
- ・「文化創造」（黎明書房） 1999年、共著
- ・「小中一貫（生活・総合）の学び」（黎明書房） 2005年、共著

## I 専門分野

教育制度論、教育経営論、教育課程論、特別活動論

## II キーワード

キャリア教育、グローバル人材、アクティブ・ラーニング

## III 研究テーマ

- 1 教員の養成・採用・研修の在り方について
- 2 国際社会で活躍できる人材育成のための大学教育の在り方について

## IV 研究紹介

- 1 平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の冒頭に、学校教育の現状と課題について次の記述があります。  
「これからの学校は、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力の育成等を重視する必要がある。」「一方、いじめ・暴力行為・不登校への対応、特別支援教育の充実、ICTの活用など、諸課題への対応も必要となっている。」「これらを踏まえ、教育委員会と大学との連携・協働により、教職生活全体を通じて学び続ける教員を継続的に支援するための一体的な改革を行う必要がある。」本答申を踏まえ、さらに県立学校での校長・教頭・教諭としての経験、及び県教育委員会事務局での経験も生かしながら、本学の学生を、地域社会の期待に応えられる教員として送り出せるよう、養成の在り方について研究しています。
- 2 国際化・グローバル化が進んでいるといわれます。世界には多様な文化や思想があること、そしてそれらに理解と敬意を払えることが真の国際人であることをわきまえつつ、我が国の歴史や文化について誇りを持って語ることでできる若者を育てたいと考えます。あわせて、本学で学んだ人たちは、知多の様々な事柄に精通し、多くの人たちへ正しく伝えられるようであってほしいと願います。ここ知多は穏やかな気候のもと、多岐にわたる産業がバランス良く栄えてきました。さらに、江戸時代は海運業で繁栄しましたが、近年はセントレア開港により世界との距離が格段に近くなりました。このような状況の中、我が国、さらには知多に誇りを持てる学生をいかに育てるか、その方法を研究しています。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県知多郡生まれ、半田市在住。早稲田大学教育学部理学科数学専修卒業。愛知県立高等学校教諭、愛知県教育サービスセンター教育主事、愛知県総合教育センター研究指導主事、愛知県立高等学校教頭を経て、愛知県立稲沢東高等学校長、愛知県立半田高等学校長。平成 27 年 4 月から現職。愛知県公立高等学校長会理事、愛知県公立普通科高等学校長会会長、愛知県産業教育振興会常任理事、愛知県高等学校体育連盟剣道専門部長などを歴任

■担当科目：教育制度論、教育経営論、教育課程論、特別活動論、教育実習など

### ■主な研究及び発表論文

いずれも愛知県公立普通科高等学校長会のグループ研究

研究のまとめは、各年度の会誌に掲載

- 平成 20 年度 「普通科高校の学習における初期指導の実態と課題」  
平成 21 年度 「普通科高校における新学習指導要領移行に伴う諸課題」  
平成 22 年度 「普通科高校における「生きる力」を支える確かな学力の育成」  
平成 23 年度 「これからの普通科高校の在り方」  
平成 24 年度 「普通科高校におけるキャリア教育の推進に向けて」  
平成 25 年度 「普通科高校における魅力づくりとその発信」  
平成 26 年度 「普通科高校における新教育課程の諸課題について」

## I 専門分野

戦略経営、危機管理、技術経営、人的資源管理

## II キーワード

戦略経営、危機管理、人と経営、プライド経営、大学経営

## III 研究テーマ

1. 持続性を高める戦略的危機管理の枠組みのその実践原理
2. 組織経営の本質としてのプライド経営の実践、人と心の経営
3. 大学経営における戦略経営と危機管理

## IV 研究紹介

1. 現代企業経営においてはただ一回の戦略的選択の失敗がただちに企業の存続をも左右する致命的な危機に繋がる。特に 21c に入ってから、世界規模の経済危機によって経営環境の不確実性がさらに高まっている。このような経営環境と企業経営に対する認識に基づき、組織の持続性を高める経営の枠組みと実践原理としての戦略的危機管理の実践原理に注目する。
2. 経営の主体は人間である。構成員の心を動かし、意欲を刺激し、最大限の力を発揮させる源泉になるのが、組織と仕事に対するプライド(自負)であり、それこそが経営の本質といえる。すべてが目先の経済的成果が優先視される本末転倒の経営の時代において、経営の本質としての構成員の自負に注目し、経営の目指すべき真の価値を探る。
3. 今大学経営は大きな転換点を迎えている。少子化に伴う経営環境の悪化に加え、入学者の基礎学習能力の低下に伴って大学教育の本質的な在り方に対する混乱が生じている。組織の経営戦略、危機管理の観点から今後の大学経営のあるべき姿と今の時代の大学教育の方向性を探る。今大学経営は大きな転換点を迎えている。

## 【参考】

■プロフィール：韓国ソウル出身、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了、経済学博士(経営学専攻)、韓国ポスコ経営研究所経営戦略部門リーダー(研究委員)、DBM Korea 主席コンサルタント、韓国漢陽大学デジタル経営学部/産業大学院兼任教授、情報通信大学院非常勤講師を経て、2004年から星城大学経営学部教授(現副学長)

■担当科目：経営学概論、経営戦略論、危機管理論、技術経営、経営学検定、海外ビジネスセミナー等

■社会的活動：組織学会、経営学会、日本リスクマネジメント学会、日本労務学会、賃金学会、愛知人事問題研究会、日本地域資源開発経営学会、在日韓国人研究者フォーラムに所属。

### ■主な著書・論文など

- ・危機管理論序説、1995.4、「調査と研究」、第8号、京都大学
- ・『企業危機管理の実践原理』(韓国語版)、2001年4月、芸元出版社(韓国)
- ・『経営戦略と組織間関係の構図』(共著)、第13章：戦略的危機管理、2005年3月、中央経済社
- ・「大学危機の本質と対応」、2007.9、星城大学「研究紀要」第4号、星城大学
- ・「日本企業の創造性」(共著)、創造的組織創り・創造的組織革新の条件、2008年12月、三恵社
- ・「日本の大災害から学ぶ危機管理の教訓」、2011.6、KOREA PR.review 第57号、韓国PR協会
- ・「経営における人の再考」、2016.2、愛知学院大学論叢「経営学研究」第25巻1・2合併号

## I 専門分野

経営情報学、経営工学、社会システム工学、教育工学

## II キーワード

システムシミュレーション、オペレーションズリサーチ、情報システム、IoT、ビッグデータ、シリアスゲーム、ゲーミフィケーション、情報モラル、情報セキュリティ

## III 研究テーマ

1. 生産システムへの IoT 導入に伴う生産・運搬制御方式への影響
2. 反転授業の教材としてのシリアスゲームの最適選択に関する研究

## IV 研究紹介

1. わが国では、サイバー空間とフィジカル空間を融合した「Society 5.0」への取り組みを進めている。本研究では、その中核を担う IoT が備える能力のうち最適化に着目する。生産システムへの IoT 導入に伴う生産・運搬制御方式への影響について、さまざまな方式を再現できるシミュレーションモジュールを構築し、システムシミュレーション手法を用いて、多様な条件下における最適な生産・運搬制御方式を検討する。このシステムシミュレーションで用いるモデルは、サイバーフィジカルシステムの重要概念を実現するものである。また、実際の生産システムの運用におけるさまざまな環境を条件として、最適な生産・運搬方式を検討することにより、実際の企業経営や実務にも貢献できる。
2. 大学における経営学教育では、実践的な教育手法としてビジネスゲームの活用が進んでいる。一方で、シリアスゲームと呼ばれるデジタルゲームを用いた教育方法が広がりつつある。シリアスゲームには、教育用に開発されたゲームだけでなく、娯楽目的で開発されたゲーム、いわゆるコンシューマゲームを教育目的として利用する場合も含まれる。本研究では、ビジネスゲームやシミュレーションゲーミング研究の知見や実際の授業における学生からのフィードバックを手掛かりに、教育手法の一つである反転学習により経営学教育を行うため、教材として相応しいデジタルゲームを選択する際のガイドラインを提示することを目的とする。

## 【参考】

- プロフィール：名古屋大学経済学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士課程（後期課程）修了、博士（経済学）取得。同大研究員（2006年4月）、星城大学経営学部講師（2006年10月）、准教授（2011年4月）、2019年4月から教授。また、地域センター副センター長、元気創造研究センター長を歴任し、2018年4月からは星城大学情報センター長を務める。
  - 担当科目：情報システム論、情報リテラシー、生産システム論、情報処理演習 等
  - 社会的活動：日本経営システム学会 評議員、日本ロジスティクスシステム学会 理事、東海市産業推進会議 議長、東海市次世代産業審査会 委員 等
  - 主な著書・論文など
    - ・『Simio とシミュレーションモデリング・解析・応用（第4版）』2017年、Createspace Independent Publishing Platform、共同翻訳
    - ・「環境配慮型生産システムの設計・分析に対するモデリングモジュールの開発」2017年、『星城大学研究紀要』Vol.17、pp. 1-12、単著
    - ・Module-Based Modeling and Analysis of Just-In-Time Production Adopting Dual-Card Kanban System and Mizusumashi worker, 2017 Winter Simulation Conference, 共同発表
    - ・「シミュレーションの新たな可能性」2019年、『中部経済新聞』
- （その他の業績は大学 Web サイトの教員紹介ページ、あるいは Researchmap (<https://researchmap.jp/read0134173>) に掲載）

## I 専門分野

考古学、文化人類学

## II キーワード

まちづくり、まちの魅力再発見、文化財、細井平洲・上杉鷹山

## III 研究テーマ

1. 歴史的な文化財（地域資源）を活用したまちづくり

## IV 研究紹介

1. 私は考古学が専門ですので、長年にわたって遺跡や史跡の保存と活用について関心を持ち続けてきました。まちづくりに関しては、重要伝統的建造物群保存地区指定地域を見学すること、まちづくり株式会社の活動を調べること、などを継続しています。
2. 個人的には、知多地域のマンボ（横井戸）の情報をあつめ農業土木遺産として保存することを目指しています。マンボとは、ため池に伴うトンネル状の導水路のことで、知多半島では江戸時代末から明治時代にかけて作られたようですが、ひょっとすると西アジアのカナート、中国のカレーズに起源があるかもしれない貴重な遺構です。マンボをまちおこしのための観光資源に出来るかもしれません。
3. 尾張国知多郡平島村（現在の東海市）出身の細井平洲は江戸時代の儒学者で、米沢藩の藩政改革を成功に導いた上杉鷹山侯の師として知られています。現在の日本が置かれた状況は江戸時代の米沢藩と酷似しており、細井平洲・上杉鷹山の教え・活動を学ぶことによって、われわれの生活を向上させるヒントが得られるかもしれません。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県春日井市在住、南山大学文学部卒業、南山大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学、1985年から（財）愛知県埋蔵文化財センター調査研究員、1993年から名古屋明德短期大学国際文化科専任講師、1997年同助教授、2003年から星城大学助教授、2008年から同教授
- 担当科目：ゼミナール（観光まちづくり）、考古学、博物館学、観光学概論、総合ことば演習
- 所属学会：日本考古学協会、日本西アジア考古学会、日本地域資源開発経営学会
- 社会的活動：東海市文化財調査委員、東海市都市計画審議会委員、春日井市文化財保護審議委員、国土館大学イラク古代文化研究所共同研究員
- 主な著書・論文など
  - ・「野外考古学におけるデジタルカメラの活用について—オラーン・オーシグ I 遺跡の発掘調査より—」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』pp.345-360、伊藤秋男先生古希記念考古学論文集刊行会、2007年
  - ・「知多半島のマンボ（1）」『研究報告 とうかい』創刊号、pp.81-89、東海市教育委員会、2007年
  - ・「知多半島のマンボ（2）」『研究報告 とうかい』第2号、pp.50-53、東海市教育委員会、2009年
  - ・「知多半島のマンボ（3）」『研究報告 とうかい』第3号、pp.24-31、東海市教育委員会、2011年
  - ・「知多半島のマンボ（4）」『研究報告 とうかい』第4号、pp.45-50、東海市教育委員会、2013年
  - ・「マンボのルーツを訪ねて—カレーズ博物館見学記—」『研究報告 とうかい』第5号、pp.56-61、東海市教育委員会、2015年
  - ・「細井平洲・上杉鷹山の教えの現代的意義」『研究報告 とうかい』第7号、pp.33-46、東海市教育委員会、2019年

## I 専門分野

スポーツマネジメント、スポーツ社会学、スポーツビジネス

## II 研究テーマ

1. 地域スポーツクラブの少子・高齢化社会に及ぼす影響に関する研究
2. 競技スポーツのチームマネジメントに関する研究

## III 研究紹介

1. 現代社会において少子・高齢化が叫ばれていますが、「健康」というキーワードの下、様々な取り組みがなされています。この問題解決において、運動・スポーツの役割が非常に大きいと言われています。  
現在、文部科学省が推進する「総合型地域スポーツクラブ」の存在が、今後の日本のスポーツ状況を大きく変えるのではないかと考えられており、それによって日本社会が抱える諸問題にどのような影響を与えるのかを考えていきます。
2. 私は、競技スポーツの指導者として対象を大学生に現場で指導を行っております。そこでは伝統大学とは違い新設の大学ということもあり、一からのスタートです。そのため、チーム立ち上げにむけての準備、新興勢力による周囲からの協力不足などチームを運営・管理する能力が問われます。本大学の状況を事例研究として、競技スポーツのチームマネジメントに関する研究活動を行っていきます。

## 【参考】

- プロフィール：愛知県名古屋市生まれ、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士課程単位取得退学（体育学修士）、2004年から星城大学経営学部講師、2010年から准教授、2016年から教授
- 担当科目：スポーツマネジメント論、生涯スポーツ論、体育・スポーツ社会学、コーチング論
- 社会的活動：愛知大学野球連盟理事、日本体育学会、日本スポーツ社会学会
- 主な著書・論文など
  - ・「高校野球の持つ価値と問題性に関する一考察」1997年、『中京大学論叢』第38巻第2号、共著
  - ・「生涯スポーツイベント参加者がもたらす大会参加総支出額の試算」1997年、『東海保健体育科学』第19巻 共著
  - ・「生涯スポーツイベントにおける消費行動」1998年、『中京大学論叢』第39巻第2号、共著
  - ・「大学生のスポーツ活動へのコミットメントに関する一考察」星城大学『研究紀要』第9号 単著

## I 専門分野

経営学、組織論、企業文化論

## II キーワード

国際経営、華人経済、大学の国際化

## III 研究テーマ

1. 華人経済圏における日系企業の進出戦略と実務
2. 海外の高度教育研究機関による複合的・有機的連携関係に関する調査研究

## IV 研究紹介

1. 華人経済圏（主に中国、台湾、香港、東南アジアなどの地域）における進出コンサルティング経験も持っているため、共同研究のみならず、関連する実地調査や FS (feasibility study) の作成、JV (Joint Venture) のファインディングや事業運営のアドバイスなどにも対応することができます。本学の実践セミナー科目にて、経営現場の第一線で活躍されている企業の経営者や管理者を招いて学生に実践的な講義を行って頂いているので、若者に特に国際経営の実務を語って頂ける方は是非ご一報下さい。
2. 2010年4月に経済産業省と文部科学省は大学や企業が人材のグローバル化を進めて、国際的な日本の存在感向上に繋げるべきだとする提言をまとめた。社会問題の複雑化と多様化に伴って、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の育成に当たって、大学教育の現場においても国際的な連携や産学連携が重要なキーワードとなっている。本研究は前述の時代要請に応えるためのものだと位置づけたく、海外の高度教育研究機関との複合的・有機的な展開の可能性を探り、従来型の2校間協定による交流とは異なる教育プログラムを行い、真のグローバルなネットワークの構築をはかりたい。将来的には、既存の提携校に加えて、総合的な連携によるコンソーシアム形式の交流や海外インターン、オンラインによる授業交換などを実現し、大学経営と学生教育の活性化にも繋がりたいと狙っている。

## 【参考】

■プロフィール：1958年台湾・台北市生まれ。京都大学経済学部卒業、同大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。1991年に三和総合研究所（現「三菱UFJ Research & Consulting(株)」）金融戦略部研究員（正社員）として入社。同社の国際経営開発部、企業戦略室のシニアコンサルタントなどを経て、2002年4月から星城大学経営学部教授・学部長。日本経営学会、日本労務学会、日本台湾学会、中国経済経営学会、日本地域資源開発経営学会の会員。

■担当科目：グローバルマネジメント、ベンチャービジネス論、異文化理解演習、実践セミナー、海外ビジネスセミナー、海外ビジネス演習（中国語圏）、ゼミナール など。

■社会的活動：株式会社松本微生物研究所取締役（社外）、名城大学非常勤講師。台湾国立放送大学商学部・京都大学大学院経済学研究科非常勤講師、中国湖北大学商学院講座教授、中華民国行政院僑務委員会僑務促進委員、セムイ学園東海医療専門学校理事なども歴任。

## ■主な著書・論文など

- ・「環境保全と教育事業は今後も中国の有望なビジネス分野であり続ける」2009年みずほ銀行『みずほ中国 法務・税務・労務ヘッドライン』No.3、単著。
- ・「日本の大学国際化と国際教育の発展趨勢」2008年、台湾『東亞論壇季刊』No.462、単著。
- ・『労務管理と人的資源管理の構図』、2005年、中央経済社、共著。
- ・「近年における日本企業の対中企業戦略の変化と動向」2005年・星城大学経営学部『研究紀要』No.2、単著。
- ・「中国の私営企業とベンチャービジネス ―躍進する私営企業とその課題―」2004年・全国日本学士会『アカデミア』No.86、単著。
- ・『活路を拓く台湾産業』2002年、財団法人交流協会、共著 など。



## I 専門分野

日本語教育学

## II キーワード

日本語教育、キャリア教育、キャリア形成支援、外国人留学生に対する就職支援

## III 研究テーマ

1. 外国人留学生のキャリア形成過程と意識
2. 地域社会での「やさしい日本語」の普及と活用

## IV 研究紹介

1. 日本学生支援機構 (JASSO) によると、日本の高等教育機関や日本語教育機関等で学ぶ外国人留学生数は、2019年5月現在、約31万人となり、増加の一途をたどっています。アルバイトをする外国人留学生の存在が広く社会に認知されるようになり、また、教育機関を卒業後、日本で就職する留学生も増加しています。留学生が日本で留学生生活を送る中で、どのようにキャリア意識を育み、キャリア形成していくのかについて研究しています。また、留学生が主体的に卒業後の進路を決定できるように、積極的に支援を行っています。
2. 日本で生活する外国人や訪日外国人の増加に伴い、様々な分野で「やさしい日本語」が求められています。本学留学生への調査結果等を基に、地域社会における「やさしい日本語」の活用を提案しています。

## 【参考】

■プロフィール：愛知県半田市生まれ。名古屋商科大学商学部国際経済学科卒業（国際経済学士）、名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 博士後期課程 日本語学・日本語教育学 単位取得満期退学（日本語教育学修士）。貿易大学（ベトナム・ハノイ）日本語教師、韓国国立順天大学校人文社会科学大学客員教授（日本語教育担当）、名古屋外国語大学非常勤講師、星城大学経営学部講師を経て、2019年4月より現職。一般社団法人日本産業カウンセラー協会認定産業カウンセラー、キャリアコンサルタント。キャリアコンサルタント（国家資格）。

### ■担当科目：

[外国人留学生対象科目] 日本語Ⅰ・Ⅱ、総合基礎演習Ⅰ・Ⅱ、キャリアサポートⅢ 他  
[一般教養科目] 異文化コミュニケーション

### ■社会的活動：

- ・東海市観光ビジョン推進委員会 副委員長
- ・日本語教育学会、社会言語科学会、留学生教育学会、専門日本語教育学会、異文化コミュニケーション学会、キャリアデザイン学会会員

### ■主な著書・論文など

[研究ノート] 伊藤春子・比留間洋一 (2019) 「私費外国人留学生の特徴—アルバイトに関する意識実態調査から—」『星城大学研究紀要』第19号 pp.29-36 他

[口頭発表] 愛知県立大学多文化共生研究所 公開セミナー『外国人留学生の就職・定着及び企業における留学生の採用・育成の課題』登壇者（発表・パネリスト）2019年11月17日 他

[新聞寄稿]

- ・「特定技能と外国人留学生—キャリア形成に対する教育的支援を—」中部経済新聞「オープンカレッジ」（8面）2020年3月18日掲載
- ・「留学生に『選ばれる』職場とは—外国人留学生とアルバイト—」中部経済新聞「オープンカレッジ」（8面）2019年3月6日掲載
- ・「外国人が働きやすい環境づくりを一留学生への就職支援—」中部経済新聞「オープンカレッジ」（8面）2017年2月14日掲載

#### I 専門分野

マクロ経済学

#### II キーワード

マクロ経済、資源・エネルギー、中東経済、中国経済、非営利経済

#### III 研究テーマ

中東、アジア地域のマクロ経済分析

#### IV 研究紹介

1. 中東、アジア地域を中心に、途上国、新興国のマクロ経済を研究しています。経済成長における資源・エネルギーや人口変動などの要因から生じる課題と解決の方向性について、主に産業や貿易構造の分析からアプローチしています。非資源国はもとより、今後、人口ボーナスを迎える資源国においても、資源に依存しない産業構造への転換、国内産業の育成やグローバル・バリューチェーンへの参入が急務となります。当該分野の研究は対象国経済のみならず、2030年以降のグローバル経済における重要な生産拠点・市場の視点から、日本経済にとっても有益と考えます。
2. 中国の経済・社会開発分野の国際協力事業に20数年従事したことをきっかけに、途上国・新興国の財政課題と社会政策についてもライフ・ワークとして取り組んでいます。

#### 【参考】

- プロフィール：群馬県太田市生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得満期退学。日中建築住宅産業協議会、笹川平和財団、武田計測先端知財団、千葉経済大学等を経て、2020年より星城大学准教授。
- 担当科目：経済学概論、環境経営論、ゼミナールⅠⅡ、自分づくりゼミナールⅠⅡ、総合基礎演習ⅠⅡ。
- 社会的活動：(特活) NPO 研修・情報センター理事。地域の課題を解決するコミュニティ・レストランの普及・啓発や酒蔵を中心とした街づくりなどの支援活動などを行っています。
- 主な著書・論文など
  - ・「自由変動為替相場制への移行のエジプト財政への影響」2019年、『千葉経済論叢』第61号、単著
  - ・「エジプトの変動為替移行のマクロ経済への影響」2019年、『千葉経済論叢』第60号、共著
  - ・「ヨルダンの貿易構造と生産性」2018年、『千葉経済論叢』第58号、共著。
  - ・「低石油価格下におけるイラク財政運営－財政反応関数の推計と債務に関するリスク分析－」2017年『千葉経済論叢』第56号、共著。
  - ・王名・李妍焱・岡室美恵子『中国のNPO』2002年、第一書林。
  - ・服部健治・丸川知雄編著『日中関係史1972-2012—経済』2012年、東大出版会、P289-297。
  - ・明石純一編著『国際労働力移動と世界的経済危機』2011年、明石書店、P210-226。
  - ・安里和晃編著『労働鎖国ニッポンの崩壊』、2011年、ダイヤモンド社、P262-287/P344-345。
  - ・中国研究所編『中国年鑑』2004年版以降「NGO・NPO」執筆担当。

## I 専門分野

経営組織論、経営管理論、人的資源管理論

## II キーワード

社会－技術システム

## III 研究テーマ

1. 自律性について
2. ノーマル・アクシデント理論と高信頼性理論について

## IV 研究紹介

1. 新型コロナウイルス感染症の影響もあり、在宅勤務が広まっています。在宅勤務では自分の裁量で働くことができ仕事と家庭の両立がしやすく満足といった声がある一方、生活部分と仕事部分の区切りがしにくくペースがつかめない、生産性が落ちた、という意見もあります。他方、在宅勤務が難しい生産現場などでは、会社から指示されたことをひたすら実行することを求められることがあります。自分が考えたやり方で仕事を行うことと、生産性や満足感の関係について研究しています。
2. 福島第一原発事故以来、どうすれば事故を避けることができるかについての議論が日本でも高まっています。一口に事故といっても、工場の中に限定され現場の人たちが遭遇するものから、めったになくともいったん起こると工場内だけでなく外部の多くの人たちを巻き込む大事故まであります。企業で起こる事故に対し、経営学では、様々な考え方があります。これらの考え方を整理し、どうしたら事故を避けることができるかを研究しています。

## 【参考】

■プロフィール：名古屋大学経済学部卒業、名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了（博士（経済学））、大阪成蹊短期大学などを経て、2020年より現職。

■担当科目：キャリアサポートⅡ・Ⅲ、ゼミナールⅠ・Ⅱ、総合基礎演習Ⅰ・Ⅱ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、国際労働、日本経済論

■社会的活動：公益財団法人 阪和育英会評議員

### ■主な著書・論文など

- ・『組織学への道』2014年、文真堂、共著
- ・『経営学史叢書 第Ⅷ巻 ウッドワード』2012年、文真堂、共著
- ・『組織論から組織学へ—経営組織論の新展開—』2009年、文真堂、共著
- ・『現代経営組織論』2005年、有斐閣、共著
- ・「社会－技術システム論における『責任ある自律』の概念—Bionからの影響について—」2020年、『大阪成蹊短期大学 研究紀要』第17号（通巻57号）、単著
- ・「組織の生成・発展と技術システム」2013年、『経済科学』第60巻第3号、単著
- ・「課業志向と改善活動—社会－技術システム論の観点から—」2010年、『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第39号、単著
- ・「社会－技術システム論と Bion（ビオン）の諸研究」2009年、『名古屋外国語大学外国語学部紀要』、第37号、単著
- ・「トヨタ生産方式と労働者の自律性—社会－技術システム、フォード・システムとの比較において—」2002年、『経済科学』第50巻第3号、単著
- ・「組織における個人の自律性」2002年、『経済科学』、第49巻第4号、単著

## I 専門分野

人的資源管理、組織行動、キャリア開発

## II キーワード

人的資源管理、組織社会化、エンゲージメント、ワークモチベーション、採用

## III 研究テーマ

1. 予期的社会化段階における育成・採用・教育に関する研究
2. 組織社会化、ワークモチベーション・エンゲージメント向上に関する研究
3. 個人・組織のパフォーマンス向上に関する研究

## IV 研究紹介

1. 四大経営資源のうち、「ヒト」をどのように活躍できる人材に成長させるかの研究を行っている。「企業は人なり」と言われ、永続的な繁栄のためには優秀な「ヒト」を採用・育成することが不可欠であるため、各企業や時代に合わせた効果的な方法論を研究している。

## 【参考】

■プロフィール：総合コンサルティングファームにて人事を主とした経営コンサルタントとして企業、自治体等で各種制度構築・組織風土改革・人材育成支援を行った後、他大学准教授を経て現職。

■担当科目：人的資源管理論、女性経営者論、インターンシップ等

■社会的活動：1) 経済産業省 特許庁管轄「知財人材スキル標準のあり方に関する調査研究」委員会委員、2) 東京都特別区(23区統括)人事委員会女性職員活躍推進アドバイザー  
3) 国家資格キャリアコンサルタントの有資格者に対するの更新講習の講師

### 【公開講座・講演・研修】

- 1) 厚生労働大臣指定 国家資格キャリアコンサルタント更新講習「組織におけるキャリア開発とケースワーク」、「大学生向けキャリアコンサルティング実践」
- 2) S-HRM 研究会「メンター制度の重要性および運用方法」についての発表
- 3) 尾張旭市 市民講座「人材多様化時代における職場での人間関係の保ち方」講演
- 4) 国税局、中、熱田、千種税務署「職場のメンタルヘルスマネジメント研修」セルフケア編(6回)、ラインケア編(3回)
- 5) 岐阜市役所主催 一般向け就職・転職支援「就職パワーアップセミナー」講演
- 6) 就職ウォーカー presents 「キャリアガイダンス女子会(名古屋)」『女子学生のための就活講座』講師
- 7) 日本キャリア開発協会主催 F3 研究会「産学連携プロジェクトにおける人材育成について」講演
- 8) 国公立大学生限定就職活動イベント「LIVE VOICE」特別講演『面接対策講座』講師
- 9) ジモト de オシゴト 三重就職企業展「就職成功ポイントセミナー」講師
- 10) 「自律型人材育成と組織力アップのコツ」(りそな総合研究所)
- 11) 「会社から必要とされる人材になる～女性社員のための仕事力アップ講座」(共立総合研究所)
- 12) 「人を活かす経営」(OBC 人財マネジメント DAY:オービックビジネスコンサルタント)
- 13) 「女性のためのキャリアアップ実践力プログラム」『人的資源管理演習』(文部科学省「職業実践力育成プログラム(BP)」認定一般教育訓練給付制度厚生労働大臣指定講座)講師
- 14) 「人財マネジメント実践塾 ～人材育成手法・人材開発機能の強化策を学び実践する～」講師
- 15) 「強い会社づくりのための戦略的人材育成強化策」講師

### ■主な著書・論文など

- 1) 「内定獲得後の予期的社会化段階における実態調査」2017
- 2) 「短期大学生における職業意識調査分析および実践型キャリア教育プロセスの提言」2015
- 3) 連載「本気で進める！女性社員の戦力化」「『三位一体』改革が女性活躍推進のコツ」「女性社員の育成はタイミングが命」「女性を部下に持つ管理職の育成」「女性を活躍させる制度や仕組み」
- 4) 「日本企業における後期若年層を対象にした社内メンター制度の必要性及び運用方法の研究」2008

## I 専門分野

観光学、まちづくり論、都市・地域計画

## II キーワード

まちづくり論、都市・地域計画、観光政策論、地域振興政策、コミュニティデザイン論、環境配慮行動、合意形成論、環境デザイン

## III 研究テーマ

1. 国際博覧会やテーマパークの計画設計及び観光産業や地域経済に与える影響に関する調査・研究
2. フィルムロケーション活動と地域経済との関係性に関する調査・研究
3. 地域通貨及びエコマネーがまちづくりに与える影響に関する調査・研究
4. まちづくり活動に関わる人材育成に関する調査・研究

## IV 研究紹介

1. 本格的な少子高齢化時代を迎え、まちづくりや地域計画、観光振興計画領域も少子社会、人口減少社会に向けて具体的な解決策や計画手法が求められています。国の政策として地域活性化や地域再生の手法の一つとして観光振興を挙げられています。観光が地域再生や地域活性化に与えるインパクト及び効果的な導入手法についての研究を地域の市町村及び地域住民や企業・団体の協力を得て深めていきたいと考えています。
2. 工学的なアプローチのみならず、社会環境学の見地からソーシャルキャピタルなどの地域社会の構造に着目したコミュニティデザインと循環型環境都市との関係性や、利他的な環境配慮行動に関する研究経験を踏まえて行ってまいります。観光産業の発展や観光行動の多様化に伴い、観光学の領域は、拡大の一途をたどっており、地域計画、都市計画、まちづくり計画との関係性について解き明かし新たな地域再生手法の提言を行い、人口減少社会における新たな社会の在り方を探って、まちづくりや地域計画領域にフィードバックしたいと考えています。

## 【参考】

- プロフィール: 兵庫県出身、名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻博士後期課程単位取得退学、日本工営(株)、(公社)科学技術交流財団コア研究員、名古屋大学研究員、(公社)東三河地域研究センター主任研究員を経て、2019年より星城大学准教授。技術士(総合技術監理部門)(建設部門:都市及び地方計画)
- 担当科目: 都市経営論、観光事業論、都市情報論、文化継承論、自分づくりゼミ、総合基礎演習
- 社会的活動: 東海市まちづくり評価委員会委員、東海市まち・ひと・しごと創生推進委員会委員、あま市まち・ひと・しごと創生総合戦略委員会座長など
- 主な著書・論文など
  - ・日本都市計画学会中部支部編、谷口庄一、『幻の都市計画ー残しておきたい構想案ー: 瀬戸市南東部地区新住宅市街地整備事業』、樹林舎、pp.181-184、2006
  - ・(財)都市づくりパブリックデザインセンター・都市環境デザイン会議編、谷口庄一、『日本の都市環境デザイン・第2巻北陸・中部・関西編: 中部ブロックにおける都市環境デザイン パナキュラーなもの』、建築資料研究社、pp. 51-53、2002
  - ・谷口庄一、森川高行、『エコポイントが環境配慮行動に与える影響ー愛知万博での事例報告』、土木学会論文集G Vol. 63, No. 4, pp.403-412, (2007)
  - ・TANIGUCHI shoichi、MORIKAWA takayuki、『A STUDY ON ENVIRONMENTALLY CONSCIOUS BEHAVIOR IN A RECYCLING-ORIENTED SOCIETY』、PROCEEDINGS OF ENVIRONMENTAL SCIENCE AND TECHNOLOG、Vol. (II), 647-652. AMERICAN SCIENCE PRESS, NEW ORLEANS, 2005.

## I 専門分野

経営学、経営戦略、経営管理、マーケティング

## II キーワード

アグリビジネス、地域マネジメント、アライアンス、サプライチェーン・マネジメント

## III 研究テーマ

1. 持続可能な農業農村
2. サービスマーケティング

## IV 研究紹介

1. 酒米である山田錦を生産する農村集落をモデル地域として、人口減少や高齢化などの農村集落の課題の抽出と、地域独自の村米制度という酒蔵との取引についての農家意識を、持続可能な農村集落の維持にどのように活用できるかについて、調査研究しています。
2. サービスとは第3次産業のサービス業だけのことだと考えている人も多いかと思いますが、第1次産業や第2次産業にもサービス化が進んでいます。特に第1次産業である農林水産業のアグリフードビジネスにおいては、サービスマーケティングが重要なポイントになります。第1次産業×第2次産業×第3次産業＝第6次産業と、第1次産業である農業者が第2次の加工製造や第3次の流通販売にまで関わることを農業6次産業化といいますが、実際の事例を基に第1次産業におけるサービスマーケティングの重要ポイントなどを研究しています。

## 【参考】

■プロフィール：兵庫県三木市吉川町生まれ、広島大学大学院社会科学研究科博士後期課程単位修得、公益財団法人浜松地域イノベーション推進機構（静岡大学）地域連携コーディネーター、関西国際大学准教授などを経て、2019年より星城大学准教授

■担当科目：ゼミナール、流通論、起業実務、農業経営管理論、インターンシップ、その他

■社会的活動：日本経営学会、日本マネジメント学会、日本経営診断学会、地域農林経済学会、日本農業経営学会、日本地域資源開発経営学会に所属

### ■主な著書・論文など

- ・「地方創生とアグリビジネス－農村集落のアライアンスを中心に－」2017年、日本マネジメント学会『経営教育研究』第20-2号、単著
- ・「地方大学の地域貢献と社会人教育－高知大学の人材育成プログラムを中心に－」2017年、関西国際大学教育総合研究所『教育総合研究叢書』第10号、単著
- ・「アグリビジネスとソーシャルイノベーション－ブランド戦略の視点から－」2016年、広島大学マネジメント学会『ディスカッションペーパー』、単著
- ・「アグリビジネスのサプライチェーンにおける価値創造－老舗醸造業を事例として－」2016年、広島大学マネジメント学会『ディスカッションペーパー』、単著
- ・「提携・垂直統合の行動原理とダイナミックケイパビリティ－清酒醸造企業と酒米生産農家との取引関係を中心に－」2016年、広島大学マネジメント学会『ディスカッションペーパー』、単著
- ・「アグリビジネスにおける環境価値と戦略的アライアンス－VRIOのフレームワークによる分析を中心に－」2016年、関西国際大学『関西国際大学研究紀要』第17号、単著
- ・「アグリビジネスにおける異業種間連携と垂直統合－農商工連携と農業6次産業化を中心に－」2012年、日本経営診断学会『日本経営診断学会論集』第12号、単著
- ・「アグリビジネスにおけるサプライチェーン・マネジメントに関する一考察－山田錦の村米制度を事例として－」2011年、地域農林経済学会『農林業問題研究』第182号、単著
- ・「地域活性化に資するソーシャル・ビジネス－徳島県上勝町の事例を中心に－」2008年、日中社会学会『21世紀東アジア社会学』創刊号、単著

## I 専門分野

運動生理学、トレーニング科学、健康科学

## II キーワード

運動処方、体力トレーニング、アンチエイジング、運動パフォーマンス

## III 研究テーマ

1. 競技種目特性に応じた呼吸筋トレーニング方法の明示
2. フレイル・ロコモ予防のための効果的な運動プログラムの開発
3. 効率的かつ効果的なレジスタンストレーニング法の開発

## IV 研究紹介

運動・トレーニングによって身体に生じる応答・適応現象を生理学的な面から観察することで、運動パフォーマンスの向上を図るための方法を研究しています。

1. 必要な酸素を身体に取り込むために活動を続ける横隔膜などの呼吸筋に対するトレーニング(呼吸筋トレーニング)の効果を競技種目の特性を考慮することで最大化させる狙いのもと、種類の異なる呼吸筋トレーニングによるパフォーマンス向上効果を呼吸循環応答の裏付けに基づいて調べています。
2. つまづくなど思わぬ事態になった際、適切に身体を動かす判断とそれに伴う動作がとっさにできないことで生じてしまう骨折や転倒等の要支援・要介護になるリスクを軽減させる狙いのもと、自らの身体の重さを負荷としたできる限り素早い動作を含めた運動プログラムを作成し、本プログラムの効果を身体機能および認知機能の面から調べています。また、本プログラムを地域の方々にご活用頂くための取り組みも行っています。

## 【参考】

- プロフィール：三重県出身、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科博士後期課程修了（スポーツ健康科学博士）、順天堂大学医学部附属順天堂医院健康スポーツ室、順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科特任研究員、名古屋大学未来社会創造機構(医)特任助教を経て、2019年より現職
- 担当科目：トレーニング論、健康概論、体の仕組みと病気、スポーツ実技 I 陸上、生命と科学、自分づくりゼミ I・II・III・IV、総合基礎演習 I・II
- 社会的活動：輪い和いパワーアップ運動教室(豊田市) 顧問、日本体力医学会会員、日本老年医学会会員、ランニング学会会員 など
- 主な著書・論文など
  - ・”Effect of various exercises on frailty among older adults with subjective cognitive concerns: A randomised controlled trial”, *Age and Ageing*, afaa086, 2020, 共著
  - ・”Association between locomotive syndrome and blood parameters in Japanese middle-aged and elderly individuals: A cross-sectional study”, *BMC Musculoskeletal Disorders*, 20(1): 104, 2019, 共著
  - ・”Relationship between physical activity and locomotive syndrome after a 3-month exercise intervention of walking and stair climbing in elderly Japanese individuals”, *Juntendo Medical Journal*, 62(1): 218-224, 2017, 共著
  - ・”A combination of body mass-based resistance training and high-intensity walking can improve both muscle size and VO<sub>2</sub>peak in untrained older women”, *Geriatrics & Gerontology International*, 17(5): 779-784, 2017, 共著
  - ・”Influence of muscle fibre composition on muscle oxygenation during maximal running”, *BMJ Open Sport & Exercise Medicine*, 1(1): e000062, 2015, 共著

## I 専門分野

現代中国語文法、中国語教育、言語学

## II キーワード

中国語学 / 中国語教育 / 日中対照言語学 / 言語学

## III 研究テーマ

1. 現代中国語における再帰表現に関する研究
2. 現代中国語における身体部位名詞の意味拡張について (認知言語学的アプローチから)
3. 日本語と中国語の指示詞に関する対照研究

## IV 研究紹介

民間では、地域のカルチャーセンター等で中国語講座が開講されています。しかしながら、幅広い年齢層や中国語学習の経験により、習得レベルに差があるといったように、経歴の異なる方々が同時に受講しているケースが多々見られ、授業をスムーズに行えないといった問題が発生しています。

このような問題を解決するには、クラスレベルの細分化、少人数制クラスの設置、それに伴う講師の増加などが必要であると考えられます。そこで、地域との連携により、公共施設を利用した複数の教室開講、地域と密着した講師の確保や地域の方々と講師との協力に基づいた教室運営といった方法が挙げられます。

また、中国語や中国文化に興味をもつ人達が協力し合うことにより、イベント等の企画開催も行うことができ、更なる地域活性化が期待できると思われれます。

中国語講座の開講や運営に関してご相談がある際には、どうぞお気軽にご連絡ください。

## 【参考】

■プロフィール：三重県いなべ市生まれ、名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士後期課程修了、2009年から星城大学経営学部講師

■担当科目：中国語Ⅰ・Ⅱ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、総合基礎演習Ⅰ・Ⅱ

■社会的活動：(所属学会) 日本中国語学会、中国語教育学会、日中対照言語学会、日本語学会

### ■主な著書・論文など

- ・“试论“头”的基本义和语义扩展”(訳:「頭」の基本義とその意味拡張について) 2005年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第5号所収、単著
- ・「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008年、名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻『多元文化』第8号所収、単著
- ・「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V+身体部位 N」の形式を中心に」2008年、『星城大学人文研究論叢』第4号所収、単著
- ・「現代中国語における“被”構文と主題文について——「V+身体部位 N」形式の再帰表現を中心に」2009年、『星城大学人文研究論叢』第5号所収、単著
- ・「現代中国語の再帰表現における受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+被+N<sub>a</sub>+VP」形式を中心に」2010年、『星城大学人文研究論叢』第6号所収、単著
- ・「現代中国語の再帰表現における自然受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N+VP」形式を中心に」2011年、『星城大学人文研究論叢』第7号所収、単著
- ・「日本語と中国語の指示詞に関する一考察」2019年、『星城大学 研究紀要』第19号所収、単著
- ・「日本語と中国語の指示詞に関する一考察 ——「ア系」と“这”が対応する場合を中心に」2020年、『星城大学研究紀要』第20号所収、単著



#### I 専門分野

地域社会学、観光まちづくり

#### II キーワード

観光まちづくり、郷土芸能、神楽、山車まつり、中山間地域

#### III 研究テーマ

1. 郷土芸能（神楽、山車祭り）による観光まちづくり
2. 中山間地域の生活様式と地域経営
3. 生業と観光とまちづくり

#### IV 研究紹介

1. 知多半島における祭り・郷土芸能と観光まちづくり
2. 中山間地域・離島における生業×観光まちづくり  
グリーンツーリズム、ブルーツーリズム、海業など

#### 【参考】

■プロフィール：広島県広島市生まれ。国立木浦大学校自治福祉行政協働課程修了、2016年より星城大学講師

■担当科目：まちづくり論、地域産業論、社会学、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、ゼミナールⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、フィールドワークⅠ・Ⅱなど。

#### ■社会的活動：

- ・にっぽんど真ん中祭り東海市太田川駅前会場実行委員会 委員
- ・ザ・おおたジャンプアップフェスティバル実行委員会 委員
- ・東浦町社会教育委員
- ・東海市地域大円卓会議実行委員会 幹事
- ・東海市中心市街地活性化協議会 委員
- ・東海市福祉観光ウォーキングコース検討委員会 委員
- ・大田まちづくりの会 顧問
- ・NPO 法人広島神楽芸術研究所 理事
- ・NPO 法人日韓（韓日）農業・農村文化研究所 理事

#### ■主な著書・論文など

- ・「内海・本土近接型離島における海業の生成過程・要因に関する事例研究－愛知県南知多町篠島の株式会社篠島お魚の学校を例に－」2019年『星城大学研究紀要』第19号、pp17-27、単著
- ・「中山間地域における郷土芸能の伝承活動と観光資源化－広島県北広島町の神楽団へのヒアリングから－」2015年、広島修大論集、56巻1号、pp95-105、単著
- ・「郷土芸能による地域振興とその課題-広島県北広島町の神楽団実態調査から-」2014年、広島修大論集、55巻1号、pp91-104、単著
- ・「『広島神楽』の伝承過程と興隆に関する社会学的研究」2012年、広島修大論集、53巻1号、pp265-279、単著

## I 専門分野

運動生理学、水泳

## II キーワード

骨代謝、メカニカルストレス、骨形成

## III 研究テーマ

1. 骨を鍛える
2. 低カルシウム摂取と骨強度
3. 小学校体育授業のサポートシステムに関する研究

## IV 研究紹介

1. 骨は、運動による負荷が加わった部位にカルシウムを沈着させ、骨密度を増加させる事が知られている。これまで、ラットのジャンプトレーニングにより、特に脛骨の骨肥大に大きく影響をおよぼす事を報告してきた。また、運動強度は強い方が、より顕著な効果を得る事ができる。また、ジャンプの回数は10回程度でよく、それ以上の回数はより良い結果が得られるものの対数曲線に近似する結果となる。また、低強度の運動ではジャンプの回数を増加させる事で骨強度が高くなる結果が得られ、ジャンプの回数と強度の相互関係が示された。
2. さらに、ラットに低カルシウム食を摂取させながらジャンプトレーニングを行わせた結果、運動群の下肢骨骨密度が顕著に増加した。この不足分のカルシウムをどこから得られたのか検討した結果、臀部の骨密度が顕著に低下している事から、臀部の骨から下肢骨へとカルシウムの置換が行われた可能性を示唆した。
3. 近年、子どもの体力低下が非常に大きな問題となっており、身体を操作する能力、生活習慣病の危険性の高まり、仲間（意識）の減少（低下）および学力レベルの低下にまで影響があるとされている。本研究では、体育・スポーツ学を専攻している大学生を小学校に派遣し、毎朝行う運動介入および体育授業における模範演技や活動補助、活気あふれる授業づくりの一端を担う、小学生の体力向上に向けたサポートシステムを作成する事を目的とする。

## 【参考】

- プロフィール：兵庫県神戸市出身、中京大学体育学部卒業、中京大学大学院体育学研究科博士後期課程中退（体育学修士）、中京大学大学院体育学研究科助手、中京大学体育学部健康科学科講師、2012年より星城大学講師
- 担当科目：運動・スポーツ生理学、体育実技（水泳）、スポーツ栄養学、レクリエーション実技
- 社会的活動：東海シティマラソン実行委員、地域住民のための健康づくり運動教室、各スポーツイベントのボランティア派遣等
- 主な著書・論文など
  - ・“Effects of low- repetition jump exercise on osteogenic response in rats.” *J Bone Miner Metab* 26(3), 2008, 共著
  - ・“Bones benefits gained by jump training are preserved after detraining in young and adult rats.” *J Appl Physiol* 105(3), 2008, 共著
  - ・“High-impact exercise frequency per week or day for osteogenic response in rats.” *J bone Miner Metab* 26(5), 2008, 共著
  - ・“Non-uniform decay in jumping exercise-induced bone gains following 12 and 24 weeks of cessation of exercise in rats.” *J Physiol Sci* 61(6), 2011, 共著
  - ・“A few separated jump training sessions three times per week increase bone strength in rats.” *Adv Exerc Sports Physiol* 16(3), 2011, 共著
  - ・“貯金アップ教室参加者の身体的な特徴および運動継続に関する一考察 “愛知大学体育学論叢第 22号、2015、単著

## I 専門分野

日本語教育学

## II キーワード

日本語教育、地域日本語教育、多文化共生、地域に住む外国人、初年次教育、キャリア形成支援

## III 研究テーマ

1. 地域日本語教育の実践と支援に関わる人材育成
2. 多文化共生とまちづくり
3. 初年次教育におけるアクティブ・ラーニングの活用

## IV 研究紹介

### 1. 【地域日本語教育・日本語教室に関わる研究】

地域日本語教室の立ち上げ、運営に携わりながら、その地域で必要とされる地域日本語教育や日本語教室、また、地域日本語教室で活動する「日本語支援ボランティア」の養成について研究・実践を行っています。

### 2. 【多文化共生の実践研究】

愛知県には2019年6月現在、約27万人の「生活者」としての外国人の方が住んでいます。これは、全国で東京に次ぐ2番目に多い数です。このような外国人の方々と「文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていく」ために地域の「多文化共生」が求められています。しかし、多文化共生はすぐに実現できるものではなく、様々な課題があります。このような背景のもと、多文化共生実現に向けての活動や実践をとおり、地域の日本人、外国人が共に輝き活躍できる多文化共生に社会実現に向けた実践研究を行っています。

## 【参考】

■プロフィール：福井県出身、知多郡東浦町在住。名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科 博士後期課程 日本語学・日本語教育学 単位取得満期退学（日本語教育学修士）。韓国 釜山外国語大学校日本語学科、中国 東北育才中日友好分校日本語教師、企業内外国人社員向け日本語研修講師、名古屋外国語大学 日本語教育センター/アカデミック・スキル科目担当、愛知学泉短期大学 生活デザイン総合学科 他 非常勤講師、名古屋大学とよた日本語学習支援システム事務局を経て、2020年4月より現職。

キャリアコンサルタント（国家資格）、キャリア・デベロップメント・アドバイザー（CDA）

■担当科目：日本語論文、日本語スピーチ、自分づくりゼミⅠ・Ⅱ、総合基礎演習Ⅰ・Ⅱ

### ■社会的活動：

- ・多文化共生ひがしうら 日本語教育コーディネーター
- ・東浦町委託事業「日本語支援ボランティア養成講座」「共に学ぶ多文化共生講座」コーディネーター
- ・NPO 法人法人あいち子ども若者キャリア教育支援センター 副代表理事
- ・日本語教育学会、日本リメディアル教育学会会員

### ■主な著書・論文など

- ・内山喜代成・梶原彩子・**松本美紀**「日本語支援ボランティア養成講座のあり方を再考するー養成講座参加者の日本語支援ボランティア・養成講座に対する意味づけからー」言語文化教育研究会 第6回年次大会（2020年3月）
- ・鈴木崇夫、松本美紀、磯村美智子「愛知県H地区における外国人家庭の言語継承の実態」〈ポスター発表〉日本言語政策学会第18回大会（2016年6月）

星城大学 研究シーズ集

2009年11月 初版

2020年9月 改訂第15版

編集・発行：星城大学 地域センター

連絡先：

〒476-8588 愛知県東海市富貴ノ台 2-172

星城大学 地域センター

Tel : 052-601-6000 (代表)

e-mail : [koryu@seijoh-u.ac.jp](mailto:koryu@seijoh-u.ac.jp)